Fkobe R0409.pdf

2022 四季折々

From Kobe 2022

【From Kobe 2022 9月】 経済評論家　内橋克人氏 没後一年 神戸新聞特集「内橋克人の歩いた道」転記収録

期待一杯の秋の始まり From Kobe　fkobeR0409.pdf　2022.9.1.

朝夕　めっきり涼しくなって　季節の替わり目　我が家の庭もすっかり夏から初秋に
気分も変わって　期待を膨らませる　嬉しい秋の訪れです
願いは一つ　穏やかな暮らしの秋へ　　街に出て　久しぶりの再会も楽しみたいと

2022.9.1.　from Kobe　Mutsu Nakanishi

我が家の庭もすっかり変わり、初秋の庭に　2022.8.29
でも今年咲くのが遅れた朝顔が　毎朝　門先をこんなに美しく飾っています。

また　久し振りに出かけた三宮　目の前を連結した路線バスが目の前を行く。
三宮にも　路線バスに連結バスが走るようになったんや・・…
また　新装なった新阪急も中にはまだ入ってない。　ほんまに随分田舎者になったと・・…。

先が見えぬ毎日　いろんな思いが交錯する昨今
年老いて自分では　なにもできぬもどかしさでも　いまを元気にと思うのですが・・…

毎日歩く散歩道　空を見上げるとはっとする雲の美しさ。
毎日手にするデジカメ・スマホの写真にもビックリすることもある。　何はともあれ、この雲の美しさを伝えたい
まぁ　力にはならぬが、毎日　新しい発見がある
これも幸せのひとつかと
なにはともあれ、いまを元気に God be with You!!
９月の神戸便りです。
酷暑にまいって頭働かず。でも　元気にしています
Photo メッセージを連ねた便りお許しください。
これといった話や新聞記事の紹介等の収録なし

近くの里では秋の味覚の出荷に大忙し
伊川谷の農家Sさんから「イチジクの出荷が始まり、ジャム用のも残しているよ」との電話
今か今かと待っていた家内は　イチジクジャム作りに大わらわ
コロナ爆発で中々神戸の外へは出にくい毎日ですが、夏から初秋へ　嬉しい秋の訪れ

元気でお過ごしでしょうか……
連絡もなかなかとれぬ中で　老化してゆくわが身を感じる毎日ですが、
「自分の身は自分で守る」の心意気
引き続き感度をあげて　我慢せず　助けの声をあげて!!
仲間がいる　互いに連絡とりあって　また再会できますよう
「過酷な夏　そしてコロナ禍も　もう少し もう少し」と自らを励ましつつ
仲間みんなにエールを送ります

でも ひとりじゃない　時には声を上げて がんばらないで!!
仲間がいる 仲間の笑顔・思いは みんなの応援歌
お互い声かけあって、スクラム組んで この厳しい夏を乗り切りましょう
今はコロナにかからぬことが一番 無理せず 自らをお守り下さい。
また、台風・集中豪雨など自然災害にもご注意ください
相も変わらずですが、秋の始まり9月神戸便りをお届けします

God be With You!! 元気に前向いて
厳しい夏から　爽やかな秋へ
2022.9.1.　From Kobe　　Mutsu Nakanishi

足元で白鷺が舞うがごとく咲く自生の鷺草が咲く
加古川西岸　加西市網引湿原へ　2022.8.21.

「夏の終わり 鷺草が咲く網引湿原の見事な美しさ」と湿原でカメラ手を構える人に教えてもらった加西市網引湿原
我が家の鷺が咲くのを見て、原チャリ走らせ湿原に

鷺草が咲く網引湿原へ 2022.8.24.
2回目で、場所はよく知る加古川西岸 小野アルプス福甸峠の直ぐ北側 北の加西市側からしかない四方を里山で囲まれた湿原
こんな所に地元でよく管理された湿原があるとビックリでした。
今回も出会ったのは一人だけ。でもみんなお目当てはでも お目当てはみんな鷺草の花
我が家にも一鉢あるが、自生種は中々見られない。約一時間うれしい湿原独り占めに。
湿原入口 北条鉄道がすぐ北を走る走る加西市南網引の里から眺める
加西の田園風景も緑一杯 この時節ならでは・・・ 心地よし。

■ 蕨手刀を手に戦った東北の蝦夷に思いを寄せて　　NHK 番組歴史探偵「日本の刀剣」視聴

古代蕨手刀を手に大軍を率いる征夷大将軍　坂之上田村麻呂など討伐軍を大いに悩ました蝦夷の雄　阿弖流為

和鉄の道掲載スライド　https://infokkkna2.com/ironroad2/2022htm/iron18/R0409warabite.mp4

私の好きな東北　もう通いだして４０年余り。最近は東北へでかけることもありませんが、北東北の縄文遺跡がユネスコ世界文化遺産になって、目にする機会も多くなり、クローズアップされる機会が多くなって、嬉しい限り。

また、この夏の甲子園　仙台育英高校が優勝し、白川の関を越えて、東北に優勝旗をはじめて持ち帰った。

東北人の思いはひとしおだろうと。

東北に通って初めて知った古代　蕨手刀を手に大軍を率いる征夷大将軍　坂之上田村麻呂など討伐軍を大いに悩ました蝦夷の雄　阿弖流為のこと等々　次々思い出される視聴でした。

日本刀の原点とされる古代の蕨手刀の科学調査の結果や、「妖刀村正伝説」の真相解明 など、今も日本人と切っても切れない刀剣について紹介した番組。目を凝らして視聴。中でも　東北蝦夷が手にした「蕨手刀」のこと。

日本刀の源流といわれるが、鉄素材・蕨手刀製作について、まだよくわかっていない。

世に今は日本刀ブームと言われ、多くの人が関心を持っていると聞くが、虚構と真実が入り混じった情報がますます多い中、どう読み取ればいいのかと。　という私もちょいかじりの関西人。東北はわからぬことが多く、和鉄の道に掲載してきた東北の鉄についても　チェックせねばと・・・・。

また、本当に懐かしい東北　TV に知る地名が出るたびに懐かしく、特に自然災害被災のニュースには気がかりに。

一度　東北をたずねたいなぁと夢膨らませています。

また　青森ねぶたのお囃子の音が無性に聞きたくなって　この視聴資料をスライド動画にして BGM に・・・・

https://infokkkna.com/ironroad/2016htm/1603tpb01aterui.pdf

■ 桂文珍さんの落語的見聞録　　頭を空っぽにして　ほっと一息　文珍さんの話術を

コロナ禍の中で「達者な親父になれるかなぁ」神戸新聞８月１１日朝刊より

毎月楽しみにしているユーモアたっぷり、それでいてぴりっとした落語をネタにした世相の時事放談

今月の話の枕は　いつも新聞でしっかり探す「補聴器」「薬・サプリメント」・・・・

そしてテレビから聞こえてくる「デイ・ブイ・デー(DVD)」の社長の元気な姿

年寄り　みんな同病　みすかされているなぁと。　こちらも　ふむ ふむ　みんなみてるんやと。

そして落語「茶屋迎え」へ　そして落語の落ちへ。　文珍さんに座布団

元気な親父たちの登場に　ちょっとうらやましく　みんな思いは一緒をやなぁと嬉しくも・・・・・

文珍さんの落語見聞録« ８月»　達者な親父になれるかな
神戸新聞2022.8.11.朝刊より

2022年(令和４年)8月11日　木曜日

文化

落語的見聞録

達者な親父になれるかな

試合をテレビで観戦し、阿神がリードしているとき、阿神がリードしていたのに、ヤクルトにホームランを打たれた相手投手になった。翌日の日は延長で阿神が負けた。あー残念ノ そしてCM。その内容が、競馬に新しくできた水曜ルールでの不倫相手の独演会のCMだった。何もこんな安いイミングで流さいでもええ社会は安寧。これが味わい深い。親父は心配し「番頭と言えない。ありがたいこと」だ。

年を重ねると面白いもので徐々に物を買わなくなる。たいがいの物はある。ただし、健康に関する物にはついつい手が出る。テレビも地上波で流れる番組はBSで、またCSで時代劇なんを昔の映像を見る。流れるCMがやれ健康食品や、上手の痛み止め、そしてそう、一番面白いのは、夢グループの社長と女性とのやりとり。「今回はこの番頭遊びばかりして良ってこない。出来の悪い伜の多ッッと入れたとたん「若旦那、お帰りになります」「エーノ あー親不孝」と言ってくれたとたん、「あの親不孝者め…」と嘆いていると、昔世話をした芸者にバッタリ。なつかしいと、話そうち、ムラムラしてお茶を飲もうとしたら、「ちょっと待ってください。」

（かつら・ぶんらん＝落語家）

＝次回は９月８日＝

会社を定年退職し、親戚からが、能屋にもつていかれる。「水戸黄門」ばかりやっている。代劇なんを昔の映像を見る。お父さん、外に出て、社会とかかわりを持ってください。落語に出てくる若旦那さんは遊ばすぎ。「番頭さん」では、番頭で待たされる。2時ではゆたちがドンチャン騒ぎ、「あの親不孝者め…」と言ってはいるが、昔世話をした芸者にバッタリ。なつかしいと、話そうち、ムラムラしてお茶を飲もうとしたら、「若旦那、お帰りになります」「エーノ あー親不孝」と言ってくれたとたん、番頭が行くか、これも戻らず、次に番頭が行くか、これも戻ってこない。どちらも。

年寄り　みんな同病　みすかされているなぁと。　こちらも　ふむ ふむ　みんなみてるんやと。

そして落語「茶屋迎え」へ　そして落語の落ちへ。　文珍さんに座布団

元気な親父たちの登場に　ちょっとうらやましく　みんな思いは一緒をやなぁと嬉しくも・・・・・

■ ８月１６日　京都五山の送り火　ことしも行けず TV 中継で

８月16日 京都五山の送り火 ことしも行けずで TV 中継見ての盆送りになりました
先に逝ってしまった仲間たちへ 安らかにと

地球人として　みんながみんな　穏やかで平和な暮らしが取り戻せますように

暑い夏になるといつも頭をよぎるのは「命は宝」「広島」「平和ってなんだろう」
「戦後」の言葉が見消え、高度情報化の刹那・仮想現実に彩られて、「自己責任」の競争社会に戸惑う日本。今年はほど「地球人としての自分」を考えたことはなし
ロシアの侵攻によるウクライナの悲惨な現実と核の危機・歯止めがかからぬ世界的コロナ感染の大流行・CO2地球環境変化による激甚災害等々
われら地球人 自分さえよければ‥ではどうにもならず。
地球規模 人類が生き延びてきた道「相手を思いやる心」今一度かみしめよう「平和ってなんだろう」
2013年夏 広島で当時小学1年生だった安里有土君が朗読した詩「へてわって すてきだねだね」がいまも頭の片隅にあります。
いま 世界各地でそして日本で幾多の困難に直面し、闘っている人たちに感謝を込めて 連帯のエールを送ります。

もう　自分の時代ではないと感じる昨今ですが、
まだまだ好奇心旺盛　気力もあり、足も復活。
不定期になりそうですが、元気に前向いて発信をと。
後期高齢者だからとは言えなくなった新型コロナへの戦い
そしてポストコロナの時代へ
みんなの一番の願いは穏やかな日常の生活を取り戻せること
前向いてがんばりましょう

困難の中にある仲間に　思いをはせています。
みんな老いと向き合う年に
一人で頑張らず、無理せず　みんなに声あげて!!
仲間がいる。仲間の元気はみんなの応援歌
互いに連絡取り合って　元気に前向いて笑顔で今を。

仲間の元気は　みんなの応援歌 !!
頑張りすぎず、時には声をあげて !!
お互いスクラム組んで
助け合ってこの難局を乗り越えましょう
笑顔で逢えるのを　楽しみにしています
ワクチン接種も済ませましたが、
まだまだ収束は道半ば
どうか　無理せず、元気に前向いて
お過ごしください

また連絡ください　　*God Be With You!!*

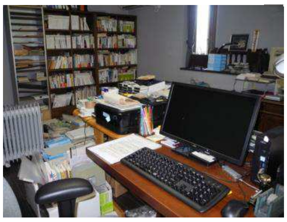
From Kobe　　Mutsu Nakanishi

2022.9.1. from　Kobe　Mutsu　Nakanishi

狭い縦走路のドクン中にどっしりと座り
いつも元気をもらうウバメガシノ巨樹

群生するウバメガシの中を歩く
西六甲須磨縦走路で

いつも元気を貰う妙法寺
車の里の車の里大歳神社のの大楠



経済評論家 内橋克人 主要作品リスト

（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優績店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の匠、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「重厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる瞬間、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、退き際の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代	尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、隗より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

共生の大地へ　没後1年・内橋克人の歩いた道

高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

柔和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝2007年、大阪市北区

筆一本真っすぐに生きた

共生の大地へ　没後1年・内橋克人の歩いた道

❶ 荒野渺茫（びょうぼう）

今しがたまで内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたかのようだ。神奈川県鎌倉市の自宅書斎。膨大な書籍と資料が並ぶ。机上にはNHKのラジオ用原稿。蛍光ペンで線を引き、補足が書き込まれている。最後のメッセージとなった2021年8月1日放送「脱炭素社会―日本の針路を考える」だ。

急性心筋梗塞で救急搬送されたのは3日後の4日。自身は帰宅できるつもりだったというが、次第に容体は悪化し、9月1日午後4時37分、亡くなった。享年89。それから1年。妻泰子さん(85)は話した。「真っすぐに前を向いて走る人でしたね。本当に横向かないです。真面目に真っすぐ行く人でした…」

1932（昭和7）年、神戸市須磨区生まれ。12歳のとき神戸空襲を経験。神戸商科大（現兵庫県立大）を卒業した57年、神戸新聞に入り、経済記者として歩みだした。以来64年、筆一本で駆け抜けた。

「最初の7年間だけは神戸新聞にいたが、その後はいかなる組織にも属さずやってきた。いま何が始まっているのか、それが未来を明るくするいい芽なのか、逆にこれは危ないぞということなのか。この識別を他の人より相当早く、ある種のにおいで感じ取ることができるようになった」

国家や経済の大義が個人を脅かしてはならない。現場を歩きながら人間が主人公の「共生経済」を説き続けた。信念の原点となったのが大切な人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

書斎のデスクトップパソコンの後ろに止まったままの掛け時計が横たえてある。針が指し示すのは大震災発生時刻の5時46分。あの瞬間、浮かび上がった社会の断面。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない」

戦争と震災の体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫」（2013年）でつづった。「いま、『暗い時代』への予感は的中し、一度は地に埋めたはずの『戦中・戦前なるもの』が新たな装いを凝らしてむくむくと立ち上がり、荒い呼吸で四囲を封じ込める」

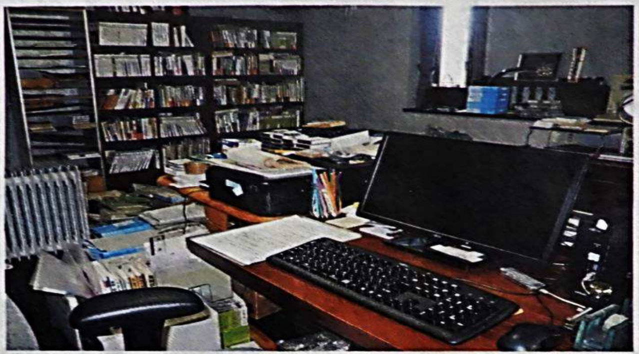
（加藤正文）

12面に続く

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道　❶

1面から続く



内橋克人さんの書斎。たゆまぬ努力で取材と思索を重ね、膨大な著作を世に出した＝2022年7月31日、神奈川県鎌倉市

本質見抜いた洞察力

内橋克人さんなら、いま同時代にどんなメッセージを発しただろう。収束が見通せないパンデミック（世界的大流行）、迫りくる気候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻で戦争も現実となった。国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起きた。揺れる世情にあって目指すべき社会の姿はますます不透明になっている。

■危険な予兆

「時代状況としてとらえる目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。1978年の「ドキュメント恐慌」。失業、生活困難、自殺…。「追いつめられるごく普通の生活者の姿は、あの『昭和恐慌』の時代を彷彿とさせる」。社会不安の中、濱口雄幸、井上準之助、団琢磨らを襲ったテロとなり、戦争と軍国主義への道に至った。暗い時代の危険な予兆。「恐慌が高じて戦争に至る」と評論家の佐高信さん(77)との対談で語った。

終生、権力におもねらず、市井の人々の目線で現状を分析し、警鐘を鳴らした。「市場と権力」「資本主義と闘った男」を書いたジャーナリスト佐々木実さん(56)は「経済ジャーナリズムでは経営者目線や当局目線になり、ビジネス情報の領域で処理されることが多い。社会的な視点に立って経済を語る人は極めて稀で内橋さんはその極めて稀な先達だった」。

時代を見抜く慧眼と洞察力。出世作となった「匠の時代」（78年～80年代）では人と技術の接点領域に光を当てた。一世を風靡したNHK番組「プロジェクトX」より20年以上前のアプローチだった。

■規制緩和万能論の虚妄

90年代、バブル経済が崩壊した後、規制緩和万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場原理を働かせればイノベーション（技術革新）が起き、安定した経済成長が実現できる。そうした言説に対し、95年の「規制緩和という悪夢」で米国航空業界の実情を調べ、安全性が損なわれるなどの問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会としては抵抗の術がなくなる。こうしたリスクがあることを、われわれは肝に銘ずるべきです」

「例外なき規制緩和」は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の4割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。

現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」が地域で響き合う未来を見通していた。「尊敬おく能わざる企業」「共生の大地」「もうひとつの日本は可能だ」「始まっている未来」…。題名から内橋ロマンが立ち上ってくる。

■

9月1日で没後1年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

荒野渺茫（びょうぼう）

「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝2003年、東京都千代田区

内橋 克人（うちはし・かつと、1932～2021年）神戸市生まれ。神戸商科大（現兵庫県立大）卒。神戸新聞経済部記者を経て独立。著書多数。神戸新聞客員論説委員も務めた。

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト
（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）
1960年代 外資のなかのニッポン
1970年代 恐るべき外資企業、優績店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代 経営の匠、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「重厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる瞬間、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、退き際の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代 尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、隗より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代 同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ②

地域と響く「実の技術」

「技術はちょうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまうことになるんだ」。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡―シャープとカシオ」）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クオーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出世作となった「匠の時代」。1978（昭和53）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見いだし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に12冊の文庫になるほどの生命力を持った。40年を経た今も瑞々しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷泰彦さん（8月に90歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同い年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった工場の門、歩いた生産現場、語り合った技術者たち…。「取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆者の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった」。粘りに粘ってすくいあげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた（提供）

匠の時代

夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた島谷泰彦さん（2010年）

■自賛論への警鐘

80年代初頭、バブル経済に向かう時期、日本企業の技術は米欧を超え、超一流だという「自賛論」が盛り上がっていく。戦後の「追いつき追い越せ」を合言葉に登った頂で得たジャパン・アズ・ナンバーワンという賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国』ニッポン」（82年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…。「『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦を、もっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『自己幻想』から覚醒する道であるよう思われる」

それから約40年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれないばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん・捏造、法令違反、リコール（回収・無償修理）…。生じた亀裂は次第に広がり、破断に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさについて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。

（加藤正文）

匠の時代 夕刊フジの連載をまとめて「先駆的開発者たちの実像」を副題に1978年に刊行された。シリーズでは三菱電機、松下電器産業（現パナソニック）、IBM、ホンダ、ミノルタ、東レなど世間が目を見張った技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

神戸新聞2022.9.2.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ③

経済学の在り方を問う

内橋克人とグループ二〇〇一。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は1994（平成6）年7月から雑誌「文藝春秋」で3回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「こと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

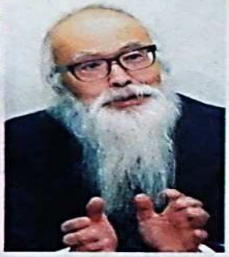
■万能論に潜む危うさ

当時の平岩外四経団連会長を座長とする細川護熙首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は「経済的規制は原則自由に、社会的規制は〈自己責任〉を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもてはやされた。

内橋さんは60代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国を調査し、新産業は本当に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何か―を詳細に調べた。「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方、中流層をなす勤労者、中小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人々が辛酸を嘗めることになるだろう」。

市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん＝神奈川県鎌倉市の自宅書斎（2014年）

規制緩和という悪夢



宇沢弘文さん（1928～2014年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（1995年）

予言は的中した。格差社会の到来だ。10年余り後の2006年刊の「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重陳、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学たちだ。規制緩和礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうただすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アピーリングな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら名だたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。2人の対談は「始まっている未来　新しい経済学は可能か」として09年に刊行された。（加藤正文）

規制緩和という悪夢 1995年刊。続編が「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」（2006年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。「経済学は誰のためにあるのか」（1997年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

神戸新聞2022.9.3.朝刊より

和鉄の道・Iron Road
経済評論家　内橋克人氏の評論他　関連資料掲載記事リスト
2022.9.1.内橋克人氏没後1年　By Mutsu Nakanishi

2021年10月　From Kobe より

「経済評論家　内橋克人氏　逝去」の訃報に接して　懐い出すままに

常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

市場原理主義に警鐘

内橋克人さん死去

89歳

評論家、共生経済提唱

追悼

神戸新聞

9月5日

和鉄の道・Iron Road
経済評論家　内橋克人氏の評論他　関連資料掲載記事リスト
2022.9.1.内橋克人氏没後1年　By Mutsu Nakanishi

■**2021.9.5.　内橋克人氏逝去追悼記事**　内橋克人氏主要業績紹介
■**2012.1.1.　年の初め　内橋克人氏の１００年後へのメッセージ**

ホームページ「和鉄の道・Iron Road－from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事リスト

◎和鉄の道・Iron Road　－2012年の初めにより
内橋克人氏「100年後へのメッセージ」
https://infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2012年1月
厳しさを力に　経済評論家　内橋克人氏１００年インタビューに共感して　by Mutsu Nakanishi
https://infokkkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsu/fkobe1201.pdf
参考添付　内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送「内橋克人　１００年インタビュー」視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013年8月より
あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮
NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介
創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にすっと入る
https://infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013年9月より
新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介
今 日本で一番求められている地域を元気にする
日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践
https://infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1309.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2018年12月より
日本の行く先がおもいやられる師走　数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る
こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも
https://www.infokkkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf

戦後　日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18.「内橋克人100年インタビュー」より

■ 戦争時代の反省　戦中・戦後　そして　今も続く社会構成の原点　日本人気質

- 頂点同調主義
- 熱狂的な等質化現象　リーダーにゆだねる・異を排する

■ 1960年代　高度経済成長　頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長

- 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
- 公害ほかの矛盾に蓋をした成長

・生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発　独創性のなさが弱点

・基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の謳歌　⇔　異を唱えられぬ日本の社会

■ 1970年代後半　石油ショックによる原油価格の急騰　「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入 ＞

1974　第一次石油ショック・中東戦争　・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト

1979　第二次石油ショック・イラン革命　・厳しい国際競争にさらされる

■ 1985年～2008年　バブル経済とその終焉　不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代

1986～　バブル景気　マネー資本主義の時代へ

アメリカ型資本主義　株価至上主義

1991　バブルの崩壊

■ 1990年代～　不況克服へ　規制緩和と企業国際化の急速展開

2001　エンロンの破たん

2000　～　雇用不安など社会問題急拡大　企業の国際化急展開

非正規雇用　外国人投資の急上昇

グローバル化　市場原理主義経済

効率化・国際競争力

金融のビッグバン強欲資本主義へ

グローバル化の名のもとアメリカ中心の枠組に日本が飲み込まれてゆく

■ 2011年　東日本大震災・原発事故　そして年金問題と破綻寸前の国家財政　急激な円高　政治の貧困

日本経済の疲弊と格差拡大　企業の海外移転の急拡大

舵取りのなき日本に先行きが見えず　社会全体に広がる閉塞感・不安感

もうひとつの経済学「理念型経済学　~市場主語から国民主語の経済~」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済　これらの自立・自給がないと　国際マネーの餌食となる

トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、国際競争力・市場主義を盾に企業・金融優遇の政策の中で　国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。

国際企業・金融依存から脱し、特に　現日本の社会の自己矛盾を生んできた源　食糧・エネルギー・高齢化〔介護・医療〕の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

- 自給自立型農業の構築

「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村

- 自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業

新しい経済は可能か

「理念型経済学　~市場主語から国民主語の経済~」の構築の実現は可能

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済

これらの自立・自給がないと　国際マネーの餌食となる

- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を

市場主語から国民主語の経済構築へ

7月16日早朝　NHKラジオ朝一番　ビジネス展望

『働き方の多様化とは何か』内橋克人　　2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説　実に明快分かりやすい解説に

私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

◎　多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎　正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて　都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。

同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、

雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。

正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、

いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル　スタンダードが

非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、

けっしてそんなことはない　」

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎　例えば、『オランダモデル』。の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の２種類しか労働は存在しない。

2018. 11. 29.　神戸新聞（1・2面掲載）

「針路21」欄　内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相　針路21

国を危うくする言い繕い

目立つ内外の食い違い

内閣総理大臣
内橋　克人

時の政権にとって「首脳会談」は効果的なパフォーマンスの場である。安倍首相とトランプ大統領との会談は、すでに3回、プーチン大統領とは4回になる。

各国トップと親しく握手を交わすシーンが国民の目に焼きつけられ、「外交の安倍」がすりこまれる。米国首脳との「蜜月ぶり」、訪中の成果は支持率に響く。

その効果は、次のような三つの特徴がある。まず首脳会談で何が話し合われ、何が合意されたのか、会談後に明かされる両首脳の発表に食い違いが目立つことだ。「日米通商交渉入り」をめぐるトランプ氏との会談、北方領土返還をめぐるプーチン氏との会談、いずれも直後に明かされた各種の中身に両首脳間で隔たりが大きい。

第二にそれら外交パフォーマンスには事前に用意される。9月末、国連総会後の記者会見でトランプ氏は「日本はすごい量の防衛品を米国から買うことになった」と明かした。が、安倍首相自身はいまも黙して語らず、だ。

第三に国会で重要法案審議中であれ、お構いなく足しげく海外に出向く、経済界首脳の大集団が“お供”する。

「外交の安倍」は何をなんだのか、冷静な検証が求められる時がきている。

国会での首相答弁に合わせて事前、事後に新しい言葉と文脈がひねり出される。森友・加計問題では公文書まで改ざんされた。同じ手法の辻褄合わせが、国際協議の場で繰り返されれば、日本という国の信用が問われかねない。いま話題の「日米通商交渉」入りは「物品協定」（TAG）なのか、それとも「自由貿易協定」（FTA）を目指すものか。日米間で深まる認識差が顕著な例といえる。

「物品」とは農産物、工業製品など「モノ」の輸出入についての関税交渉であり、後者となれば投資から金融、通信、サービスなど広範囲にわたる包括的通商交渉となる。それを全国民ではなく日米の両国民に知らせるというのだ。

今月13日の安倍首相と米日中のペンス米副大統領との共同記者会見。ペンス氏の発言をめぐって日本のメディアは混乱した。同氏の発言をFTAと訳して報道したNHKニュースはすぐさまお詫びを迫られた。「（ペンス氏は）FTAとはいっていない」と日本政府は強弁する。

「Trade Agreement on goods」、略してTAG。「日本語・英語」である。安倍首相が繰り返す「自由貿易協定（FTA）とは全く異なる」との発言に合わせて「つくり出された」。たなかに協議会議でのペンス氏発言は「Bilateral Trade Agreement」（2国間協議の意）というものだった。

しかし、同氏は米国政府、自分のツイッターでも「Free Trade Agreement」、すなわち真正面のFTA交渉がこれから日米間で始まるのだとタッチしている。

TAGとは国内向けの通称であり、それをカリヤリ通せば、さらなる難題が待ち構える。すなわち米国の「対日戦利品」が世界貿易機関（WTO）加盟国のすべてに渡り渡ることになるからだ。WTO協定「第1条第1項最恵国待遇」の原則、いずれかの国に与える最も有利な待遇を、他のすべての加盟国にも与えなければならない、というもの。

唯一の例外規定がFTAなのであり、筆者は6月26日（日本時間27日未明）の首脳会談後からそう指摘してきた。NHKラジオ、農協新聞（10月1日付など）、AP通信はその日のうちに「FTA交渉で日米合意」と報じている。

自動車への高関税措置の撤廃がトランプ流ブラフ（脅し）の正剣だったという。

まずはTAG、次いでFTA。国内世論対策を急ぐ狙いとする安倍外交の「段階分離方式」である。日米両国で「食い違いあり」とみせて、その実、ひそかな「合意」が形成されている、と言葉遣いは筆者に明かした。農産品の大幅譲歩はもはや既定路線だ。

こうした「食い違い」はプーチン大統領との首脳会談においても顕著だった。

「日本の安倍首相は先に接近してきた」とプーチン氏は国内メディアを通じ口にした。歯舞、色丹2島の先行返還を急いだ、というのだ。しかし、安倍首相は「あくまで4島だ。2島先行論はない」と強調する。

「例外なき二枚舌」と政府関係者は呟く。巧みな「言い繕い」をくりかえすのか。国の内外で食い分ける外交手法は国家的リスクをも伴う。国民の「知る権利」と「安全保障の秘密保護」の両立をどうするか。「ツケ先送り」の典型例が、日米国会での緊急課題である。

（うちはし・かつと＝評論家）

「安倍外交」の実相　針路21

ビジネスにも就活にも
ひょうご経済プラス

神戸新聞NEXT

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（１）荒野渺茫（びょうぼう）　筆一本、真っすぐに生きた

2022.09.01

柔和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝２００７年、大阪市北区

今しがたまで内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたかのようだ。神奈川県鎌倉市の自宅書斎。膨大な書籍と資料が並ぶ。机上にはＮＨＫのラジオ用原稿。蛍光ペンで線を引き、補足が書き込まれている。最後のメッセージとなった２０２１年８月１日放送「脱炭素社会－日本の針路を考える」だ。

急性心筋梗塞で救急搬送されたのは３日後の４日。自身は帰宅できるつもりだったというが、次第に容体は悪化し、９月１日午後４時３７分、亡くなった。享年８９。それから１年。妻泰子さん（８５）は話した。「真っすぐに前を向いて走る人でしたね。本当に横向かないです。真面目に真っすぐ行く人でした…」

内橋克人さんの書斎。たゆまぬ努力で取材と思索を重ね、膨大な著作を世に出した＝２０２２年７月３１日、神奈川県鎌倉市

「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝２００３年、東京都千代田区

１９３２（昭和７）年、神戸市須磨区生まれ。１２歳のとき神戸空襲を経験。神戸商科大（現兵庫県立大）を卒業した５７年、神戸新聞に入り、経済記者として歩みだした。以来６４年、筆一本で駆け抜けた。

「最初の７年間だけは神戸新聞にいたが、その後はいかなる組織にも属さずやってきた。いま何が始まっているのか、それが未来を明るくするいい芽なのか、逆にこれは危ないぞということなのか。この識別を他の人より相当早く、ある種のにおいで感じ取ることができるようになった」

国家や経済の大義が個人を脅かしてはならない。現場を歩きながら人間が主人公の「共生経済」を説き続けた。信念の原点となったのが大切な人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

書斎のデスクトップパソコンの後ろに止まったままの掛け時計が横たえてある。針が指し示すのは大震災発生時刻の５時４６分。あの瞬間、浮かび上がった社会の断面。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多（めった）なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない」

戦争と震災の体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫（びょうぼう）」（２０１３年）でつづった。「いま、『暗い時代』への予感は的

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト

（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優績店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の証、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「豊厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる胸部、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、変革期の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代	尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、隅より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、福山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかを、取り返すために（共著）

神戸新聞ＮＥＸＴ

中し、一度は地に埋めたはずの『戦中・戦前なるもの』が新たな装いを凝らしてむくむくと立ち上がり、荒い呼吸で四囲（しい）を封じ込める」

◇　　◇

■本質見抜いた洞察力

内橋克人さんなら、いま同時代にどんなメッセージを発しただろう。収束が見通せないパンデミック（世界的大流行）、迫りくる気候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻で戦争も現実となった。国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起きた。揺れる世情にあって目指すべき社会の姿はますます不透明になっている。

■危険な予兆

「時代状況としてとらえる目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。１９７８年の「ドキュメント恐慌」。失業、生活困難、自殺…。「追いつめられるごく普通の生活者の姿は、あの『昭和恐慌』の時代を彷彿（ほうふつ）とさせる」。社会不安の中、濱口雄幸、井上準之助、団琢磨らを襲ったテロとなり、戦争と軍国主義への道に至った。「暗い時代の危険な予兆。恐慌が高じて戦争に至る」と評論家の佐高信さん（７７）との対談で語った。

終生、権力におもねらず、市井の人々の目線で現状を分析し、警鐘を鳴らした。「市場と権力」「資本主義と闘った男」を書いたジャーナリスト佐々木実さん（５６）は「経済ジャーナリズムでは経営者目線や当局目線になり、ビジネス情報の領域で処理されることが多い。社会的な視点に立って経済を語る人は極めて稀（まれ）で内橋さんはその極めて稀な先達（せんだつ）だった」。

時代を見抜く慧眼（けいがん）と洞察力。出世作となった「匠（たくみ）の時代」（７８年～８０年代）では人と技術の接点領域に光を当てた。一世を風靡したＮＨＫ番組「プロジェクトＸ」より２０年以上前のアプローチだった。

■規制緩和万能論の虚妄

９０年代、バブル経済が崩壊した後、規制緩和万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場原理を働かせればイノベーション（技術革新）が起き、安定した経済成長が実現できる。そうした言説に対し、９５年の「規制緩和という悪夢」で米国航空業界の実情を調べ、安全性が損なわれるなどの問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会としては抵抗の術がなくなる。こうしたリスクがあることを、われわれは肝に銘ずるべきです」

「例外なき規制緩和」は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の４割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。

現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」が地域で響き合う未来を見通していた。「尊敬おく能（あた）わざる企業」「共生の大地」「もうひとつの日本は可能だ」「始まっている未来」…。題名から内橋ロマンが立ち上ってくる。

■

９月１日で没後１年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

【内橋克人】（うちはし・かつと、１９３２～２０２１年）神戸市生まれ。神戸商科大（現兵庫県立大）卒。神戸新聞経済部記者を経て独立。著書多数。神戸新聞客員論説委員も務めた。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

（２）匠の時代　地域と響く「実の技術」

2022.09.02

取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた（提供）

「技術はちょうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまうことになるんだ」。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡－シャープとカシオ」）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クオーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出世作となった「匠（たくみ）の時代」。１９７８（昭和５３）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見いだし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に１２冊の文庫になるほどの生命力を持った。４０年を経た今も瑞々（みずみず）しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷（しまや）泰彦さん（８月に９０歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同い年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった工場の門、歩いた

夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた島谷泰彦さん（２０１０年）

生産現場、語り合った技術者たち…。「取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆者の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった」。粘りに粘ってすくいあげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

■自賛論への警鐘

８０年代初頭、バブル経済に向かう時期、日本企業の技術は米欧を超え、超一流だという「自賛論」が盛り上がっていく。戦後の「追いつき追い越せ」を合言葉に登った頂で得た「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国』ニッポン」（８２年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱（ぜいじゃく）さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…。「『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦を、もっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『自己幻想』から覚醒する道であるよう思われる」

それから約４０年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれないばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん・捏造（ねつぞう）、法令違反、リコール（回収・無償修理）…。生じた亀裂は次第に広がり、破断に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさについて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。（加藤正文）

【匠の時代】夕刊フジの連載をまとめて「先駆的開発者たちの実像」を副題に１９７８年に刊行された。シリーズでは三菱電機、松下電器産業（現パナソニック）、ＩＢＭ、ホンダ、ミノルタ、東レなど世間が目を見張った技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

（３）規制緩和という悪夢　経済学の在り方を問う

2022.09.03

市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん＝神奈川県鎌倉市の自宅書斎（２０１４年）

宇沢弘文さん（１９２８～２０１４年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（１９９５年）

内橋克人とグループ二〇〇一。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は１９９４（平成６）年７月から雑誌「文藝春秋」で３回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「こと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑（うの）みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

■万能論に潜む危うさ

当時の平岩外四経団連会長を座長とする細川護熙（もりひろ）首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は「経済的規制は原則自由に、社会的規制は〈自己責任〉を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもてはやされた。

内橋さんは６０代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国を調査し、新産業は本当に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何か－を詳細に調べた。「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方、中流層をなす勤労者、中

小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人々が辛酸を嘗（な）めることになるだろう」。

予言は的中した。格差社会の到来だ。１０年余り後の２００６年刊の「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重陳、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学（せきがく）たちだ。規制緩和礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうただすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アピーリングな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら名だたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。２人の対談は「始まっている未来　新しい経済学は可能か」として０９年に刊行された。（加藤正文）

【規制緩和という悪夢】１９９５年刊。続編が「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」（２００６年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。「経済学は誰のためにあるのか」（１９９７年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

和鉄の道・Iron Road

経済評論家 内橋克人氏の評論他 関連資料掲載記事リスト

2022.9.1.内橋克人氏没後1年　By Mutsu Nakanishi

2021年10月 From Kobe より

「経済評論家　内橋克人氏　逝去」の訃報に接して 懐い出すままに

常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

評伝 市場原理主義に警鐘

追悼

内橋克人さん死去

89歳

本紙客員論説委員 評論家、共生経済提唱

神戸新聞

2021年9月5日 日曜日

神戸新聞社

正平調

神戸新聞社の記者となったのは1957（昭和32）年である。戦争を体験した人が編集局にもたくさんいたころだ。その先輩記者の一人からたたきこまれたという「記者三訓」がある◆①必ず現場へ行き、自分の目で確かめろ。いかなるときも、この鉄則を怠るな②上を向いて仕事をするな。上とは権威のことであり、上司でもある③攻める側ではなく、攻められる側にいつも身を置くように◆あの時代への苦い記憶をたたえた「三訓」を伝えたいと思ったのだろう。本紙の記者研修で力をこめて話し、NHKのラジオ番組でも時間を割いて振り返っていた。「不幸な歴史を繰り返すな」という思いを託し◆経済評論家、内橋克人さんである。89歳で亡くなった。経済記者を経てフリーのジャーナリストとなり、企業のありようなどを鋭く問うてきた。ほれぼれするような切れ味で政治の緩みもぐさりと刺していた◆著作や客員論説委員としての本紙寄稿を読んでよく思った。自分の目で見て考える。権力におもねらず、言うべきことは言う。立場の弱い人々の側に立つ。思い出話の「三訓」ではなく、自身の背骨でもあったと◆「大変な時代だけど、頑張って」。やさしい口調の励ましを思い出しながら、今はただ、高い頂を仰ぎ見る。

2021.9.5.

2021. 9. 5. 神戸新聞朝刊　一面「正平調」より

高度成長期の行き過ぎた社会・経済をいつも現場・人間主義の視点で　その行き過ぎに警鐘を鳴らし続けた経済評論家。　内橋克人さんが９月１日逝去ょされたと５日朝の神戸新聞一面に大きく掲載された。
私にとっては　面識はありませんが、忘れてはならぬ人の一人。
穏やかな語り口で、その時期 時代に応じ経て　ゆっくりわかりやすく語りかけ、「今　なにをなすべきか・・・」と教えてもらった珠玉の言葉の数々。　私にはすっと頭に・・・・。

ややもすれば、体制批判や中央・リーダー層のゆきすぎをに警鐘を鳴らす視点から、中央からは遠ざけられてきたが、その視点・まなざしは常にブレることなく、真正面　ポイントをつく。
その提言は　現在のポストコロナの新しい時代の幕開けにも一層輝きを増ている。本当に惜しい人だった。
中央で働いてほしかったなぁ・・・・と。
私にとっては会サラリーマンの壮年期　最も影響を受けた人の一人かもしれません。
高度成長期の製造現場の技術屋たちを取り上げた「匠の時代」の著作に出会ったのが最初、
単に脚光を浴びる成功物語として描くのではなく、現場で奮闘する技術屋ひとりひとりの姿にまで、目を向けて困難に立ち向かってゆく技術者の姿・そしてその姿勢に共感しつつ、教えられることが多かった。

内橋克人氏が神戸の人で神戸新聞の記者が出発点だったことを知ったのはずっと後年ですが、其の時々目にする評論やラジオから流れる言葉一つ一つにうなずき、楽しみだった。
毎朝６時40分NHKラジオのニュース番組▽マイ！Bizにスイッチを入れ、今日の出演者は???と。
内橋克人氏の評論が聞けると其の日はラッキー。　ラジオから流れる一つ一つの静かな言葉に頷くのが楽しみでした。
私のホームページの「神戸便り　From Kobe 」にも勝手ながら、何度も登場してもらって紹介してきました。
いま　振り返ると高度成長期から現在まで、悩んだときの道しるべ　　随分世話になってるなぁ・・・。
やさしさがほとばしる新聞に掲載された写真のお姿　ほんとうにありがとう
はただ安らかに天国で憩われますよう　　合掌
　　2021.9.5.　　From Kobe　Mutsu Nakanishi

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

評伝　市場原理主義に警鐘

「今日と明日をつなぐ人びとの営みが経済なのであり、その営みは、存在のもっとも深い基底で、いつまでも消えることのない個性豊かな創造としてありつづける」（『共生の大地』）。1日、89歳でこの世を去った経済評論家、内橋克人さんの60年に及ぶジャーナリスト活動の底流に流れていたのは、市井の人々への温かなまなざしだった。（千田恭剛）

12歳で神戸空襲に遭い、焼夷弾の下を逃げ惑った。1957年、神戸新聞の経済記者として歩みだした。「高度成長の時代」は後に数多くの文庫所収となる程の生命力のある作品となった。利益追求と経済の効率性を怒り、人間の尊厳を問う

前記の文を書きながら、私のホームページ「和鉄の道・Iron Road -神戸便り from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事をもう一度読み返しました。
今も変わらぬ輝きのある内橋克人氏の評論・言葉。
バラバラに掲載していましたので、主要記事をリストアップ。
このコロナ禍の中　時代が大きく変わろうとしている日本の社会・経済
みなさまにとっても参考になればとリストアップしました。

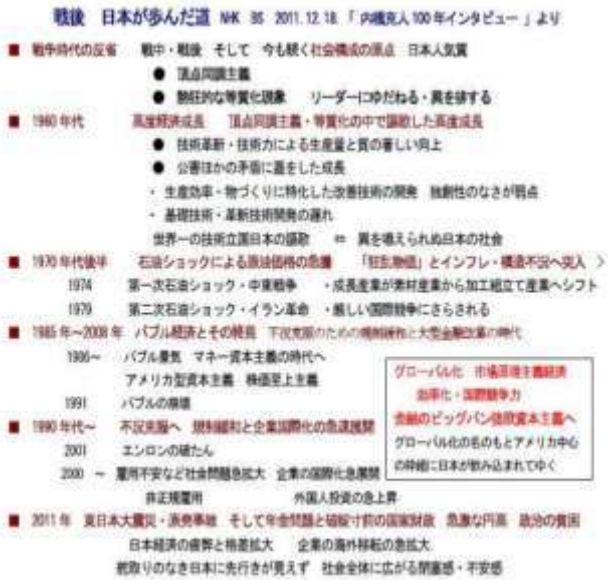
和鉄の道・Iron Road　－2012年の初めにより　内橋克人氏「100年後へのメッセージ」
https://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf

《内橋克人氏の提案する自立自給経済の創生》

【from Kobe　2012. 1. 1.　http://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf より】

被災地だけでなく　日本の疲弊がますます露わに　人間復興・社会基盤の復興の両立を
「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して　新しい日本作りに踏み出そう
もう　気がつこう　マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ
国際マネー主義から脱して　市場主語から人間主語へ
2011年12月18日　NHK BS 内橋克人　100年インタビューより

賢さをともなった勇気を持って　頂点同調主義から脱出　市場主義から人間主語へ
矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生



現代の日本人に切々と訴えかけた　内橋　克人氏の「100年後へのメッセージ」
NHK.BSプレミアム　2011年12月18日（日）放送
日本人は賢さを伴った勇気を持って行動しよう！－るいネット（rui.jp）　2011/12/19
http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697　より採取採録

○「日本人は一人一人が考え、しかっりと自分の足で立つことが出来なければ100年後も変わらない」
○「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない」
○「人間が紙くずのように捨てられる今の社会を変えなければいけない」
○「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」
○「日本人には賢さを伴った勇気が必要」

ホームページ「和鉄の道・Iron Road - from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事リスト

◎和鉄の道・Iron Road　- 2012 年の初めにより

内橋克人氏「100 年後へのメッセージ」

https://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2012 年１月

厳しさを力に　経済評論家　内橋克人氏１００年インタビューに共感して　by Mutsu Nakanishi

https://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsu/fkobe1201.pdf

参考添付　内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送 「内橋克人 １００年インタビュー 」 視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013 年８月より

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介

創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にすっと入る

https://www.infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013 年９月より

新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介

今 日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

https://www.infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1309.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2018年12月より

日本の行く先がおもいやられる師走　数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る

こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも

https://www.infokkkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf

朝日新聞　2021年(令和3年)9月88(水)　13版　文化　22

闘う主張　現場の声支えに

経済評論家・内橋克人さんを悼む

寄稿 金子勝（立教大学大学院特任教授）

内橋克人（うちはし・かつとさん。1日死去、83歳＝2014年撮影

新自由主義の流れに警鐘

理論が正しくて、現実が間違っていることはない。

内橋克人の仕事を貫いている精神だと、私は思う。1990年代、バブルが崩壊し、日本経済が行き詰まり出した時、大胆な規制緩和政策が声高に叫ばれた。規制緩和で市場原理を働かせれば、物価が下がって消費者の実質所得が上昇し、新しい産業が生まれるとわかりやすく説明された「この「新自由主義」のドグマはメディアも当然なこととして受け入れていった。

これに対して、内橋は95年に「規制緩和という悪夢」でアメリカの航空業界の実情を見ながら、安全性をも軽視する規制緩和の問題点を鋭く告発した。そして、規制緩和を主張した経済学者たちに敢然と立ち向かった。その後の格差拡大を含めて、結果は内橋の主張通りになった。当時、私はそれを見ながら、セーフティーネット論を組み立てていった。

いつの間にか、人々はできあがったドグマに縛られがちになる。研究者も例外ではない。それを正す役割を果たすのが、ジャーナリストが突きつける事実の積み重ねである。

しかし、ジャーナリストのこうした作業も、時代の流れに抗うと、しばしば孤立することになる。時代に流されるのは簡単だが、それに抗うことはとても難しい。孤立してでもドグマと闘う内橋の姿勢を支えてきたのは、一体何だったのだろうか。直接聞く機会を失ってしまったが、それは、多くの人々が自らの主張を支えてくれるという確信ではなかったのか。70～80年代の「匠の時代」シリーズを中心に、地域や中堅・中小企業の豊富な取材経験で培われた現場感覚から来ているのだろう。実際、内橋の著作が幅広く深い共感を生んだのは、地域や中小企業において、現実と格闘して生きている人々の心のひだにまで食い込んでいたからだ。

もちろん、内橋の魅力は現状批判の鋭さだけではない。未来を先取りして、代替的なビジョンを打ち出す著作をたくさん書いている。内橋は、2011年の福島第一原発事故を見通すかのように60年に「原発への警鐘」を書いた。そして00年には「浪費なき成長 新しい経済の起点」を書いた。そこで環境問題にいち早く取り組み、「新自由主義」に代えて、北欧のデンマークモデルを紹介し、F（フーズ）、E（エネルギー）、C（ケア）を軸にして地域で雇用を創る新しい経済政策を打ち出した。私も、福島原発事故以後に、農業、自然エネルギー、福祉をベースにした地域分散ネットワーク型経済が、日本経済再生の突破口になると主張するようになった。

たしかに内橋は先端の情報通信技術については詳しく言及していないが、私の主張は内橋の先駆的な仕事を踏まえたものである。結局、私は内橋の後を追いかけていただけなのかもしれない。

理論と現実の乖離が進んでいる状況の下では、私がそうしてきたように、これから先も、現実と格闘してきた人々の心を揺さぶる内橋の仕事を追いかける者たちがきっと現れるに違いない。

正平調

神戸新聞社の記者となったのは1957（昭和32）年である。戦争を体験した人が編集局にもたくさんいたころだ。その先輩記者の一人からたたきこまれたという「記者三訓」がある◆①必ず現場へ行き、自分の目で確かめろ。いかなるときも、この鉄則を怠るな②上を向いて仕事をするな。上とは権威のことであり、上司でもある③攻める側ではなく、攻められる側にいつも身を置くように◆あの時代への苦い記憶をたたえた「三訓」を伝えたいと思ったのだろう。本紙の記者研修で力をこめて話し、NHKのラジオ番組でも時間を割いて振り返っていた。「不幸な歴史を繰り返すな」という思いを託し◆経済評論家、内橋克人さんである。89歳で亡くなった。経済記者を経てフリーのジャーナリストとなり、企業のありようなどを鋭く問うてきた。ほれぼれするような切れ味で政治の緩みもぐさりと刺していた◆著作や審議会委員としての本紙寄稿を読んでよく思った。自分の目で見て考える。権力におもねらず、言うべきことは言う。立場の弱い人々の側に立つ。思い出話の「三訓」ではなく、自身の背骨でもあったと◆「大変な時代だけど、頑張って」。やさしい口調の励ましを思い出しながら、今はただ、高い頂を仰ぎ見る。 2021-9-5

2021. 9. 5. 神戸新聞朝刊　一面「正平調」より

2018. 11. 29.　神戸新聞（1・2面掲載）

「針路21」欄　内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相　針路21

目立つ内外の食い違い

国を危うくする言い繕い

内橋　克人

時の政権にとって「首脳会談」は効果絶大なパフォーマンスの場である。安倍首相とトランプ大統領との会談はすでに8回、プーチン大統領とは25回に及ぶ。

各国トップと親しく握手を交わすシーンが国民の目に焼きつけられ、「外交の安倍」がすりこまれる。米国首脳との“蜜月ぶり”演出の成否は支持率に響く。

その安倍外交に際立つ三つの特徴がある。まず首脳会談で何が話し合われ、何が合意されたのか、会談後に明かされる両首脳の発表に食い違いが目立つことだ。「日米通商交渉入り」をめぐるトランプ氏との会談、北方領土返還をめぐるプーチン氏との会談。いずれも直後に明かされた合意の中身に両首脳間で隔たりが大きい。

第二にそれら外交パフォーマンスには手土産が用意される。9月末、国連総会後の記者会見でトランプ氏は「日本はすごい量の防衛装備品を米国から買うことになった」と明かした。が、安倍首相自身はいまだ黙して語らず、だ。

第三に国会で重要法案審議中であれ、お構いなく足しげく海外に出向く。経済界首脳の大集団が“お供”する。

「外交の安倍」は何を生んだのか。冷静な総括が求められる時がきている。

国会での首相発言に合わせて事前、事後に新しい言葉と交渉がひねり出される。森友・加計問題では公文書まで改竄された。同じ手法の“使い回し”が、国際協議の場で乱発されれば、日本という国の信用が問われかねない。いま話題の「日米通商交渉」入りは「物品協定」（TAG）なのか、それとも「自由貿易協定」（FTA）を目指すものか。日米間で交わる議論経過が典型例といえる。

前者ならば農産物、工業製品など「モノ」の輸出入についての関税交渉であり、後者となれば投資から流通、金融、通信、サービスなど広範囲にわたる包括的通商交渉となる。それを多国間ではなく日米2国間で取り決めるというのだ。

今月13日の安倍首相と来日中のペンス米副大統領との共同記者会見。ペンス氏の発言をめぐって日本のメディアは混乱した。同氏の発言をFTAと訳して報道したNHKニュースはすぐさま訂正を迫られた。「（ペンス氏は）FTAとはいっていない」と日本政府は強弁する。

「Trade Agreement on goods」、略してTAG。「日本製・商品」である。安倍首相が繰り返す「自由貿易協定（FTA）とは全く異なる」との発言に合わせて「つくり出された」。ちなみに記者会見でのペンス氏発言は「Bilateral Trade Agreement」（2国間協議の意）というものだった。

しかし、同氏は来日前後、自らのツイッターで「Free Trade Agreement」、すなわち正真正銘のFTA交渉がこれから日米間で始まるのだとアップしている。

TAGとは国内向けの造語であり、それをムリヤリ通せば、さらなる難題が待ち構える。すなわち米国の「対日戦争」が世界貿易機関（WTO）加盟国のすべてに襲い掛かることになるからだ。WTO協定「第1条第1項―最恵国待遇」の原則。いずれかの国に与えた最も有利な待遇を、他のすべての加盟国にも与えなければならない、というもの。

唯一の例外規定がFTAなのであり、筆者は9月26日（日本時間27日未明）の首脳会談直後からそう指摘してきた（NHKラジオ、農民新聞＝10月1日号など）。AP通信はその日のうちに「FTA交渉で日米合意」と報じている。

自動車への高関税措置の発動がトランプ流ブラフ（脅し）の手裏剣だったという。

まずはTAG、次いでFTA―国内世論対策を裏の狙いとする安倍外交の二段階分離方式である。日米両国で「食い違いあり」とあせて、その実、ひそかな「合意」が形成されている、とも官邸筋は筆者に明かした。農産品での大幅譲歩はもはや既定路線だ。

こうした「食い違い」はプーチン大統領との首脳会談においても顕著だった。

「日本の安倍首相が先に握手してきた」とプーチン氏は自国メディアを前に口にした。歯舞、色丹2島の先行返還で合意した、というものだ。しかし、安倍首相は「あくまで4島だ。2島先行返還ではない。方針は変わっていない」と強弁を続ける。

激烈な官民評論と異質本能が一見、巧みな「言い繕い」をひねり出すのか。国の内外で使い分ける外交手法は国家的リスクをも伴う。国民の「知る権利」と「安全保障の秘密保護」の両立をうたう「ツワネ原則」の再確認、日本国政府の緊急課題である。

（うちはし・かつと＝評論家）

「安倍外交」の実相　針路21

経済評論家　内橋 克人氏の経歴（1932年７月２日 生まれ ）。

兵庫県神戸市生まれ。兵庫県立星陵高等学校、神戸商科大学（現兵庫県立大学）商経学部卒業。神戸新聞記者を経て、1967年よりフリーとなる。

日本の高度経済成長を支えた現場の技術者たちを活写した『匠の時代』で脚光を浴び、一方で『「技術一流国」ニッポンの神話』において技術立国で向かうところ敵なしと言われていた日本経済が大量生産・大量消費を前提とした量産効果に依存しているという弱点を抱えていることを指摘。主流の技術評論家や経済評論家の楽観論を批判した。また、バブル崩壊後もよく唱えられている「改革」が剥き出しの市場原理主義に則っていて社会的費用を弱者に転嫁しかねないと指摘、アメリカ流の聖域なき構造改革に厳しく警鐘を鳴らし、その対抗思潮をいち早く展開した。

参考　インターネットで見つけた　内橋克人氏のメッセージと著作抜粋リスト

現代の日本人に切々と訴えかけた　内橋　克人氏の「１００年後へのメッセージ」
NHK.BSプレミアム　２０１１年１２月１８日（日）放送
日本人は賢さを伴った勇気を持って行動しよう！ - るいネット（rui.jp）　2011/12/19 より
http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697　より採取採録
番組のエンディングでは、お一人で視聴者に切々と語り掛け、心のそこからの訴えでした

○「日本人は一人一人が考え、しかっりと自分の足で立つことが出来なければ１００年後も変わらない」
○「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない」
○「人間が紙くずのように捨てられる今の社会を変えなければいけない」
○「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」
○「日本人には賢さを伴った勇気が必要」

内橋克人氏が出版されている著書 <1>　　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋
『原発への警鐘（講談社文庫）』は１９８６年
『「会社本位主義」をどう超える新しい企業社会のパラダイム』は１９９２年
『隗より始めよ(カッパ・ホームス) 日本企業の生存条件』 は１９９２年
『破綻か再生か日本経済への緊急提言』は１９９４年
『共生の大地（岩波新書） 新しい経済がはじまる』は１９９５年
『経済学は誰のためにあるのか市場原理至上主義批判』は１９９７年
『規制緩和という悪夢』は２００１年
『「人間復興」の経済を目指して』は２００２年
『「共生経済」が始まる（NHK 人間講座） 競争原理を超えて』は２００５年
『共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道』は２００９年
いち早く新しい時代への提言を書かれています。

参考　著書一部抜粋 <2>　上記<1>のリストと一部重複しています
『共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道』内橋克人　朝日新聞出版 2009/3
『〈節度の経済学〉の時代（朝日文庫） 階層化社会に抗して』内橋克人　朝日新聞　2006/05
『「共生経済」が始まる（NHK 人間講座」 競争原理を超えて』内橋克人　日本放送出版協会 2005/02
『「人間復興」の経済を目指して(朝日文庫)』城山三郎/内橋克人　朝日新聞（城山三郎と対談）　2004/10
『〈節度の経済学〉の時代市場競争至上主義を超えて』内橋克人　朝日新聞　2003/12 I
『「人間復興」の経済を目指して』城山三郎/内橋克人　朝日新聞 2002/05 I
『規制緩和という悪夢（文春文庫）』内橋克人/グループ２００１　文藝春秋 2002/01
『破綻か再生か(講談社文庫) 日本経済への緊急提言』内橋克人　講談社 2001/11
『経済学は誰のためにあるのか市場原理至上主義批判』内橋克人　岩波書店 1997/07
『規制緩和という悪夢』内橋克人/グループ２００１　文藝春秋
『共生の大地（岩波新書） 新しい経済がはじまる』内橋克人　岩波書店 1995/03
『破綻か再生か日本経済への緊急提言』内橋克人　文藝春秋 1994/02
『隗より始めよ(カッパ・ホームス) 日本企業の生存条件』内橋克人　光文社 1993/11
『「会社本位主義」をどう超える新しい企業社会のパラダイム』内橋克人　東洋経済新報社 1992/06
『原発への警鐘（講談社文庫）』内橋克人　講談社 1986/09
『新・匠の時代（インターフェロンから核融合まで） 2』内橋克人　サンケイ　1982/02
『新・匠の時代（「生命の海」を拓く） 1』内橋克人　サンケイ　1980/09

被災地だけでなく　日本の疲弊がますます露わに　人間復興・社会基盤の復興の両立を

「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して　新しい日本作りに踏み出そう

もう　気がつこう　マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ

国際マネー主義から脱して　市場主語から人間主語へ

2011 年 12 月 18 日　NHK BS 内橋克人　100 年インタビューより

現代の日本人に切々と訴えかけた100年後へのメッセージ

2011 年 12 月 18 日　NHK BS 内橋克人　100 年インタビューより

by Mutsu Nakanishi

急激な高齢化社会が進む中　米国を中心とした体制の中で　国際マネーと市場経済に翻弄され続けた一年。
地方は疲弊し、政府は膨大な財政赤字に手を打てないまま、雇用不安と年金問題も深刻さを増す。
そんな閉塞感漂う日本に、東日本大震災と原発事故が追い討ちをかけ、後半には超円高がさらに不況と雇用不安を増す。
また、行き着くところまで来た破綻状態の財政赤字が先行き経済に大きくのしかかり、社会全体を揺さぶり続けている。
稚拙な政治は相変わらず、財界・金融と中央中心　人よりも市場・企業相手では難局克服の道が見えない。
「日本だけでなく 世界はどこも同じ????」と信じていたが、ふと気がつくと　景気のよい新興アジア諸国ばかりでなく
ヨーロッパのドイツ・北欧諸国の好景気 そしてアメリカも景気回復基調にある。
「政府やマスコミは一般世論　われわれの感じている社会を代弁している」とはとても思えぬ中にいる。
何のことはない一番あおりを食っているのは日本。　さらに次は「円」が国際マネーの標的になる可能性があるという。
他人事のように思っていた非現実の厳しい現実が自分の目の前にひろがり、呆然と立ちすくんで、
ふと気がつけば、弱者の群れの中にいる自分。　そんな格差社会が猛烈な勢いの中でひろがっている。
そんな現実が被災地に浮き彫りされている。　社会の荒波の中にただ流されてゆくのみか・・・・・。
考えて見れば、日ごろ見るテレビの中に広がる世界の薄っぺらなこと　何の理念も持たず、考える道筋すら放棄。
経済評論家内橋克人氏が警鐘を鳴らす「**頂点同調主義・熱狂的な等質化**」をあおっているだけではないのか・・と。
今年は　この現実をなんとしても　みんなで乗り越えてゆかねばならぬ厳しい一年である。
一番活力のあった「高度成長の時代」の中核を担い、今度は急速に進行する老齢化社会の中心にいる私たち団塊の世代には、
「本当に今の社会が腑に落ちない」「どこで　どうボタンを掛け間違えたのか」
「でも　なんとか　方策はないのか・・」と考えるのですが、「マスコミや政治の説く対応に対抗できる知恵を持ち合わせていない」のが悔しい。

昨年 12 月 18 日 NHK BS で　「匠の時代」の著者　経済評論家　内橋克人氏の「100 年インタビュー　」放送があった。
常々朝の NHK ラジオ　朝一番「ビジネス展望」の番組で　常に社会弱者に眼を向けつつ、現在の経済・社会矛盾をわかりやすく解説し、一番自分の考えにあっていると感じている人である。
約 1 時間半　戦後から現在まで　国際化の波に現れながら成長してきた日本経済・社会の光と影を時代を追って、本当にわかりやすく丁寧に解説指摘し、今これから　われわれは何をすべきか・・・日本の未来に何が必要か・・・を提言。
テレビにかじりついて 1 時間　画面に移される図にデジカメを向け、メモを取りながら見入っていました。

決して高ぶらず、穏やかな語り口ながら、今の社会への強い怒りと悲しみが渦巻き、声を詰まらせ、日本や世界の現実への警鐘や将来のあり方を視聴者に切々と語り掛けた。
私には「我々　団塊の世代が抱いてきた『生き方への疑問』に丁寧に答えてもらった」という気でいっぱいでした。

最近　一番感激したインタビュー　経済番組でした。

放送前　何度か「100 年インタビュー」の宣伝を見ましたので、通常の NHK 番組のごとく　再放送があるかと思ったのですが、いまだに　再放送のスケジュールなし。意図的な何かがあるのかも・・・・・

内橋克人氏　NHK.BSプレミアム　「100年インタビュー」2011年12月18日（日）

現代の日本人に切々と訴えかけた100年後へのメッセージ

○「日本人は一人一人が考え、しかっりと自分の足で立つことが出来なければ100年後も変わらない」
○「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない　・　頂点同調主義・熱狂的な等質化」
○「人間が紙くずのように捨てられる今の社会を変えなければいけない」
○「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」
○「日本人には賢さを伴った勇気が必要」
るいネット　勝寛舟氏（徳島　）のまとめ　　日本人は賢さを伴った勇気を持って行動しよう！
http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697

番組を見てもらうのが筋なのですが、再放送がないので、内橋克人氏の思いを収めた私のデジカメ画像とメモをそのまま掲載させていただき、本年　年始め　一年を送るいましめとしたいと思っています。
皆様にはいかが映るでしょうか・・・・・
下記は　1.　規制緩和と市場主義がもたらした企業収益の分配構造の変化　と 2. 今後の日本がとるべき道
一番私が知りたかった事の図面で、日本全国を本当にギスギスした本当に厳しい社会に変質させてしまった。
当時　財界・金融に迎合した政権の責任は思い。
以下　私の　2011 年 12 月　NHK BS　「内橋克人　100 年インタビュー」の受け止めのまとめです。

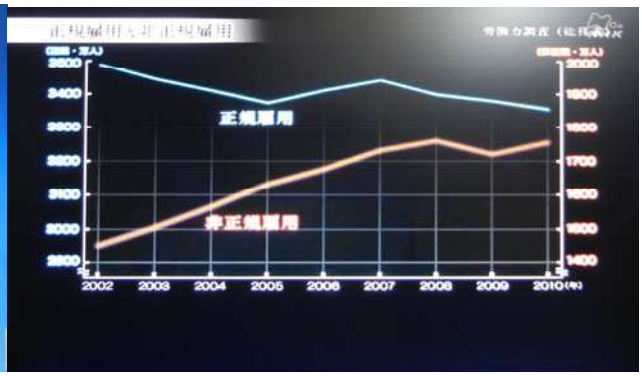
---

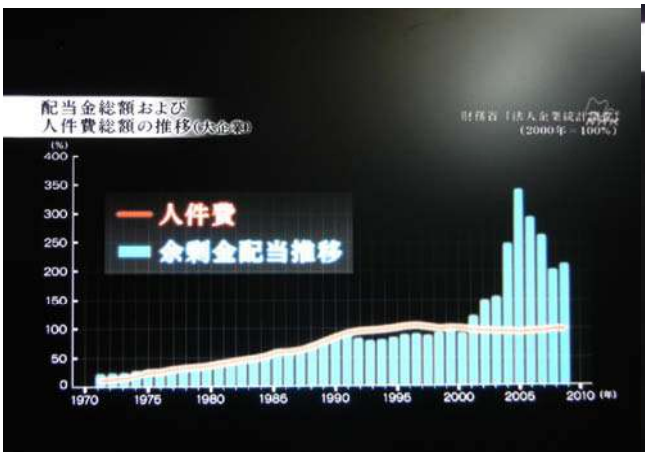
1. 1900 年代後半以降　国際競争・市場主義と規制緩和　が「働く」をどう変えたか

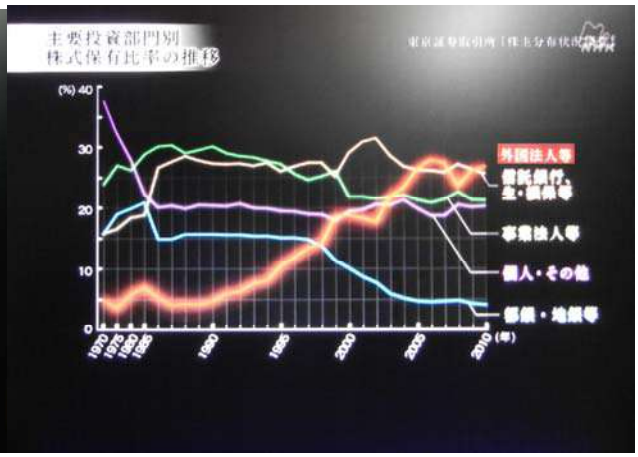
国際マネー資本主義経済に翻弄される日本が浮き彫りに

激烈な競争の導入と格差の増大　　企業・金融は国家を超えてゆく

国益と国民益の乖離







経済成長期からずっと日本経済を支えてきた「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が浸透（トリクルダウン）する」とする「トリクルダウン効果」の枠組みは 1990 年後半から完全に崩れ去っている。2000 年以降企業収益は国民に還元されず、海外へ流出している。国際企業の原理からは至極当然である。
したがって、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策では日本国民の生活は安定化しないし、国・国民の復興はなしえない。企業は国境を超え成長　収益は株主・外国人投資家に。国益と国民益の乖離がいちじるしい。

努力しても報われない社会　一人の勝者のために９９人が敗者の社会が進行しつつあることに強い怒り。

今　頂点同調では生活は守れない　自らの声を挙げよう

2. もうひとつの経済学「理念型経済学　−市場主語から国民主語の経済−」の提唱

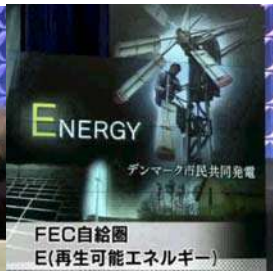
矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済

これらの自立・自給がないと　国際マネーの餌食となる

国際企業・金融依存から脱し、日本の社会の自己矛盾の源　食糧・エネルギー・高齢化〔介護・医療〕の分野で

FEC 自立・自給圏経済 を構築してゆく以外に、新しい日本の道はない。

- 自給自立型農業の構築　　「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自然・再生エネルギーでエネルギーの自立
  自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 地域住民による自給・自立の介護の機構　　介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業
  被災した釜石には自給圏構築が芽生えている



- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を

市場主語から国民主語の自給圏経済構築へ

この内橋克人さんの話　震災を受けた東北の復興には町の核となる　神社と寺　そして文化(祭り?)の整備が欠かせないという「東北学」の赤坂憲雄氏の話　そして私のよく使う「縄文帰り −縄文人の知恵−」の話と根は一緒だと感じています。

戦後　日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18.「 内橋克人100年インタビュー 」より

■ 戦争時代の反省　　戦中・戦後　そして　今も続く社会構成の原点　日本人気質

- 頂点同調主義
- 熱狂的な等質化現象　　リーダーにゆだねる・異を排する

■ 1960年代　　高度経済成長　　頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長

- 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
- 公害ほかの矛盾に蓋をした成長

・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発　独創性のなさが弱点

・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の謳歌　　⇔　異を唱えられぬ日本の社会

■ 1970年代後半　　石油ショックによる原油価格の急騰　　「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入　>

1974　　第一次石油ショック・中東戦争　　・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト

1979　　第二次石油ショック・イラン革命　・厳しい国際競争にさらされる

■ 1985年～2008年　バブル経済とその終焉　不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代

1986～　　バブル景気　マネー資本主義の時代へ

アメリカ型資本主義　株価至上主義

1991　　バブルの崩壊

■ 1990年代～　　不況克服へ　規制緩和と企業国際化の急速展開

2001　　エンロンの破たん

2000　～　雇用不安など社会問題急拡大　企業の国際化急展開

非正規雇用　　外国人投資の急上昇

> グローバル化　市場原理主義経済
> 効率化・国際競争力
> 金融のビッグバン強欲資本主義へ
> グローバル化の名のもとアメリカ中心の枠組に日本が飲み込まれてゆく

■ 2011年　東日本大震災・原発事故　そして年金問題と破綻寸前の国家財政　急激な円高　政治の貧困

日本経済の疲弊と格差拡大　　企業の海外移転の急拡大

舵取りのなき日本に先行きが見えず　社会全体に広がる閉塞感・不安感

〔　新しい日本　新しい経済学の構築　〕

賢さをともなった勇気を持って　頂点同調主義から脱出　市場主義から人間主語へ

矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生

> 理念型自給経済
> その芽はすでにある
> FEC自給圏の創生

- 高知　馬路村　ゆずの生産・加工で30億円/年
- デンマーク　自然再生エネルギーで電力自給率数% →200%へ
- デンマーク　高齢者社会の拡大の中　介護・医療の市民・地域ビジネスの構築

参考　内橋克人　NHK BS　2011.12.18. 放送

「内橋克人　100年インタビュー　」　視聴メモ　by Mutsu Nakanishi

経済評論家　内橋克人　NHK 100年インタビュー2011.12.18.　の　内容受け止め　by Mutsu Nakanishi

日本が高度成長を達成し、
技術立国日本を謳歌した時代から、
技術立国にかげりが出始める時代・
国際市場競争・金融の
マネー資本主義の時代へ

エンジンは頂点同調主義・熱狂的等質化現象
戦中からの日本人像がそのまま引き継がれ、
日本の経済成長の原動力になってゆく。
幅の広い中産階級が形成され、国民は小市民意識に沸く
国民益と国力が一致との幻想に浸る時代

国際化の波の中　経済立国日本に酔いしれ、その矛盾や実像に目を向けることなく輝く明日の日本を信じきっていた時代である
日本人の特質　頂点同調主義・熱烈な等質化現象のもとで、高度成長を遂げ、それぞれが益を実感できた時代である
１９８０年代　オイルショックとマネー資本主義の台頭・企業の厳しい国際競争激化の中で
日本繁栄の時代はもろくも崩れ去り、厳しい現実に去らされる時代がやってきた。

国際競争・市場主義と規制緩和

マネー資本主義経済に
翻弄される日本が浮き彫りに
激烈な競争の導入と格差の増大
企業・金融は国家を超えてゆく
国益と国民益の乖離

言葉の本質を明確にしない
まま規制緩和が進み
社会・労働の変質が起こる。
勝者は誰か・・・・

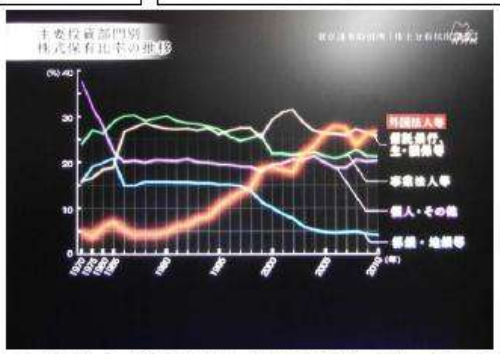
企業は国境を超え成長　国益と国民益の乖離がいちじるしい
努力しても報われない社会　一人の勝者のために９９人が敗者の社会

マネー資本主義 と ビッグバン・アプローチ
強欲資本主義の席巻

市場経済への移行は全面的かつ短期間のうちに実現されなければならないとする考え方

頂点同調の日本、なすすべもなくIMFを中心とするアメリカの支配体制の中に組み込まれてしまった。
〔パックス アメリカーナ〕

トリプルダウン効果
「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が浸透(トリクルダウン)する」とする政治思想「金持ちを儲けさせれば貧乏人もおこぼれに与れる」と主張することから、「おこぼれ経済」とも通称される。
この流れが閉ざされていることを法化無理したままで 規制緩和が進行し、社会不安・労働の変質が急速に進む



経済成長期からずっと日本経済を支えてきたトリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っている。

2000 年以降企業収益は国民に還元されず、海外へ流出している国際企業の原理からは至極当然であり、これに頼っても日本国民の生活は安定化しない

今 頂点同調では生活は守れない
自らの声を挙げよう

トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、 現在の国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策では国・国民の復興はなしえない。

震災 & 原発事故から見えた日本

頂点同調にまかせると 震災復興の名を借りた 惨事便乗型資本主義の復興が進む危険
淡路阪神代震災でも見られた人不在の復興の推進 箱もの〔建物ほか〕・筋もの〔道路ほか〕

もうひとつの経済学「理念型経済学 −市場主語から国民主語の経済−」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済 これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる

トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、 国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策の中で 国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。
国際企業・金融依存から脱し、特に 現日本の社会の自己矛盾を生んできた源 食糧・エネルギー・高齢化〔介護・医療〕の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

- 自給自立型農業の構築
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業

- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を

市場主語から国民主語の経済構築へ

「理念型経済学 −市場主語から国民主語の経済−」の構築の実現は可能

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済
これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる

〔参考〕　NHK100年インタビューと同じ論旨の記事が　2012.1.8.朝日新聞に掲載されました

2012年1月8日 日曜日　朝日新聞朝刊13面

再生 日本政治

貧困の多数派 歯止めを

経済評論家 内橋 克人さん

うちはし・かつと　1932年生まれ。神戸新聞記者を経て経済評論家。90年代から一貫して市場原理至上主義、新自由主義的改革に警鐘を鳴らしてきた。主な著書に「悪夢のサイクル――ネオリベラリズム循環」「共生経済が始まる」など。（相場郁朗撮影）

――現代日本の問題点はどこにありますか。

「日本社会でも新たな階層が生まれてきている。国民皆年金など基礎的な社会保障からさえも排除された人たちが多数派となる『貧困マジョリティー』だ。グローバル化やマネー資本主義が進み、非正規雇用が増えて中間層が崩壊する社会の到来は、危険な時代への予兆ではないか」

――貧困マジョリティーの特徴とは。

「米国はじめ国内外の最強の秩序形成者に抵抗する力もなく、生活に追われて政治的な難題に真正面から対峙するゆとりもない。同時に、精神のバランスを維持するために『うっぷん晴らし政治』を渇望する。政治の混乱を面白がり、自虐的に、極めて反射的に、表面的に評価して、選挙権を行使する。大阪市の橋下徹市長の『ハシズム現象』も貧困マジョリティーの心情的瞬発力に支えられている面が大きい。『地方公務員は特別待遇を受けている』とバッシングし、閉塞状況下の欲求不満に応えていくやり方だ」

――政治に対する閉塞感が国民の方向性を誤らせるということですか。

「『政治のリーダーシップ不足』と言われるが、民主政治を基盤とする国でのヒーロー待望論ほど異常なものはない。日本古来の『頂点同調主義』に加え、異議を唱える者を排除する『熱狂的等質化現象』が一体となる。『うっぷん晴らし政治』の渇望を満たそうとすれば、1930年代の政治が繰り返される。グローバリズムが生み出した『貧困ファシズム』の培地となりかねない」

――政治課題は山積しています。

「いまの政党政治は一挙に崩れる瀬戸際にある。今年は多くの国で政権交代が起き、政治的に極めて流動化する。グローバル化の流れは変わらず、市場原理主義のもとで、貧困マジョリティーを生み出す『貧困の装置化』が進んでいる。消費増税によって、零細企業や地域経済を支えてきた地場産業は、価格転嫁できずにコスト引き下げを迫られる。所得税なら稼いだ人がたくさん納めるが、日本型消費税は貧困マジョリティーを増幅させる『貧困の装置化』の手段になる」

――環太平洋経済連携協定（TPP）についてはどうですか。

「これも同じ。米国の政権が代わっても、米シンクタンクは一貫して『投資の絶対的自由の保障』を求めてきた。日本がTPPに入れば、外資は日本政府を米国の経済法廷に訴えることができる。米企業はオーストラリアでの医薬品への公的補助でさえ『自由市場に反する』と問題視している。日本の国民皆保険制度も目の敵にしているが、これは豊かな人も貧しい人も、ひとたび体を害せば医師にかかることができる制度で、国民的財産、社会的共通資本だ。それが毀損され、一部企業のビジネスチャンスになる。弱いところに社会的変動の影響が収斂する」

――日本の政治は何を目指せばいいですか。

「私は新たな基幹産業として『FEC自給圏』を提唱してきた。FはFoods（食糧）。日本の穀物自給率は世界で124番目だが、食糧自給は国の自立条件で新たな産業も形成する。EはEnergy（エネルギー）。再生可能エネルギーとしてデンマークでは風力発電、太陽熱発電を推進し、エネルギー自給率が今では200％近い。日本は国策として原発に集中し、ほかの選択肢を排除した。CはCare（介護）。市場に任せるのではなく、社会による介護自給圏を形成すれば北欧諸国のように強力な産業になる」

「『うっぷん晴らし政治』ではなく、世界のモデルに目を向け、食糧、介護、エネルギーの自給圏を志向すべきだ。地味でもいいから、グローバル化の中で、それに対抗できる『新たな経済』を作ることが本当の政治の役割だと思う」

（聞き手・園田耕司）

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

「NHK 朝一番　ビジネス展望　内橋克人氏の『働き方の多様化とは何か』解説」を紹介

日本社会全体に言葉とはうらはら　創造性のない時代　異常気象にだまし絵をダブらせて

2013.8.1.　by　Mutsu Nakanishi from Kobe

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

「NHK 朝一番　ビジネス展望　内橋克人氏の『働き方の多様化とは何か』解説」を紹介

日本社会全体に言葉とはうらはら　創造性のない時代　異常気象にだまし絵をダブらせて

2013.8.1.　by　Mutsu Nakanishi from Kobe

一枚の絵が眺める人の心理状態によって　幾通りかの絵に見える絵を「だまし絵」といい、何回がこのだまし絵について触れたことがある。　「即物的に見た」といっても　その見た人の心理状態によって、見えているものの危うさによく注意せねばならぬと。

先日　高校時代の仲間が自分の研究中の「哲学」についての著書を送ってくれたのですが、そんな難しい本など歯がたたぬだろうなぁ・・・・と気楽に読みはじめたのですが、面白い。

> 「哲学」「心」というのは、「本能」といった一面的なものでなく　人が生きてきた過程の中でそれぞれが作り上げたもの。したがって、「日本人の心」・「日本人の哲学」といっても　複層的なものとして捕らえるべきものだと。欧米の人の考え方も同じだ。

このことを頭に入れて思考することが大切と繰り返し数多くの実例を引いて述べられていた。

難しい内容は別にしてあれあれ・・・と。

「哲学って　揺るぎのない真理というか　確固たるひとつのもの」と思っていましたが、そんなものか。

難しいものと思っていましたが、案外私たちの身近な考えの中にあると気楽に思えたのは収穫。

また、「だまし絵」の見方と一緒やなぁ・・・・・と。

だまし絵をちらつかせての参議院選挙が終わって、自民党の圧勝。　また、政治の向かう価値観の急転が心配になる。小泉内閣の規制緩和・国際競争・グローバル化で一般庶民を窮地に追いやった人たちが、ブレーンとして復権し、　声高にアベノミックスを叫んでいるのにはもう沢山だと。

「だまし絵」を知っていて「見抜けなかった」と価値観を転換させた言い訳　言い逃れの隠れ蓑として、あまりにも多い「想定外」「経験したことがない」との勝手な納得。
これで物事を済ませてしまう風潮を作り出した人たちでないか・・・・。
言葉の遊びで切り抜けてしまう創造力の欠如が、数を頼み、「スピ-ドだ　グローバルだ」と押し進んでゆく。
そんな累々とした失敗が、ここ数十年続き、ものづくり日本の遺産も働きもので勤勉な日本人の特質も見失い、格差の小さい社会ももはや過去のものになってしまって、　そこには理念も信念もないセツナに縛られた弱肉強食の競争社会まっしぐらである。だまし討ちに会わぬ創造的な社会形成が今ほど必要なときはない。

「想定外や経験したことがないのは異常気象だけでない」
社会みんなが、そんな言葉で思考を停止していると思える最近の社会状況。
親方日の丸・グローバルな大企業や銀行・金融がわれわれの生活を守ってくれるのだろうか・・・・。
きっちりとしたプログラムを打ちたてて創造的な展開を進めないと日本は益々おかしくなるのではないか・・・・
もう楽観的には見ておれぬところでのアベノミックス。「明日はわが身」が迫り来る。
「だまし絵」発想を打ち破らねば・・・・・。　さしずめ、それを見抜かねば・・・・・と。

そんなおり、7 月 16 日早朝　ＮＨＫラジオ　朝一番　ビジネス展望　『働き方の多様化とは何か』
内橋克人さんのビジネス解説　実に明快分かりやすい解説に　私には一番すっと入ってくる話であるになるほどと。

◎　多様な働き方・雇用・労働の多様化　　「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う
◎　正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて　都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。
同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。
内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、
「　国際競争力をつけるようなグローバル　スタンダードが　非正規雇用を増やすことだとの錯覚を
日本では植えつけられているが、けっしてそんなことはない　」と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎　例えば、『オランダモデル』。の例示
同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。
均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の 2 種類しか労働は存在しない。

まさにだまし絵のなぞ解き　いつもながら　私には一番納得できる筋道である。

今や　技術力・ものづくりが群を抜いているなど幻想に過ぎなくなっている日本。
創造力のない目先だけの金融中心の効率・大量生産・使い捨て経営が日本の物づくり現場を打ち壊してきたのはもう否定できない事実である。もっとほかにやる道はなかったかと自答するのですが・・・・
アベノミックスもまたぞろ　そんな反省もないグループの復権に見えて仕方がないのは私だけか??。
皆さんにはどう見えているでしょうか・・・・いずれにせよ、東京中心主義を脱却して　落ち着いた世に早くなってほしいものです。

参考 1　昨年 10 月に全国を対象に実施された『今、日本人はどのような環境で働いているのか』調査では
パート・派遣などの非正規で働く人の数が、2043 万人と、初めて 2000 万人を突破し、雇用全体に
占める割合も 38.2%、つまりほぼ 4 割程度に達していると聴く。

◎　２０年前に比べると、非正規で働く人の数は、ほぼ 2 倍にまで増えている。
◎　正社員だった人が転職するとその内 40%以上が非正規で働かざるを得なくなっている。
◎　25 歳～ 34 歳の若者層では 、3 人に 1 人以上の人が非正社員である。
高校や大学を卒業する時の厳しい就職環境を引きずったまま、働き続けざるを得ない。

こんな状況で雇用不安を感じない人たちって・・・・どんなグループだろうか・・・
政党公約だった非正規雇用をなくす方向は今やどこかで消えてしまっている。これもだまし絵だったのか・・・

【参考】　2013. 8. 23.　追加

「心の病　会社員２割増　」「心の病におびえて働く」

2013 年 8 月 22 日朝日新聞　大阪朝刊　１面　＆ 3 面記事より

朝日新聞

8月22日 木曜日

心の病　会社員2割増

リーマン後3年 本社推計

「雇用不安」との指摘

心の病におびえて働く

「職場にばれたらクビかも」

（上記新聞記事の判読できる大きさへの拡大版を下に掲載しています）

**********　「心の病　会社員２割増」　**********

心の病 会社員2割増

リーマン後3年 本社推計

心の病にかかるサラリーマンが増えている。大企業の社員約1600万人らが入る「健康保険組合」では、受診数が2011年度までの3年間で2割増えた。仕事のストレスが原因となる病気が大半。08年のリーマン・ショック後の景気低迷で、「企業のリストラが進み、雇用不安が広がった」との指摘が出ている。▼3面＝おびえて働く

「雇用不安」との指摘

厚生労働省がまとめた医療保険の利用状況調査から、働き手本人が心の病で通院や入院した件数をもとに、朝日新聞が推計した。財政難に陥り解散する健保組合が相次ぎ、全体の加入者数は年々減っているため、加入者1千人あたりの受診件数で比較。現在の調査方法になった08年度以降を対象とした。

心の病による受診件数は リーマン・ショックのあった08年度は1千人あたり延べ235件だったが、3年後の11年度は同280件と19%増。心の病以外の病気やけがも含めた受診件数は3年間で8%増え、心の病が全体の倍以上のペースで増えていた。

11年度の心の病の内訳は、うつ病などの「気分障害」が54%で最多。パニック障害などの「神経症性障害」と合わせて、長時間労働やストレスと関係が深い病気が8割超を占める。

世代別では40代が33%と最多で、30代も3割を超えている。20代と50代は10%台と少なく、働き盛りの年代で受診の多さが目立つ。

一方、中小企業の社員約2千万人らが入る「協会けんぽ」加入者1千人あたりの受診件数も、比較できる09年度と比べ9%多かった。健保組合の方が増えた割合が大きいのは、中小より大企業の方が受診をうながす態勢が整っているためとみられる。

精神障害による労災認定の件数は、10年度以降年間300件を超す高水準。関西大の森岡孝二教授（企業社会論）は「リーマン後、正社員の間でもリストラによる雇用不安が広がった。人が減るなかで多くの働き手が長時間働き、過労とストレスが高まっている」とみている。（牧内昇平）

サラリーマンの心の病の受診件数が増えている

健保組合に加入する働き手本人の、1千人あたりの延べ受診件数の合計。厚生労働省の「医療給付実態調査」をもとに推計

**********　「心の病におびえて働く」　**********

心の病におびえて働く

「職場にばれたらクビかも」

サラリーマンの心の病が増えているのは、長時間労働やリストラへの不安が、働き手をメンタルヘルス（心の健康）の不調に追い込んでいるためだ。本人によるケアはもちろん、上司や同僚が周囲の不調のサインを見逃さないことが大事だ。

▼1面参照

介護施設で働く東京都内の40代男性は2年前、うつ病と診断された。前の職場で、上司から毎日「辞めてくれ」と言われ、同僚のミスも自分のせいにされた。

疲れているのに眠れず、毎晩酒をあおった。台所で包丁を握って首にあてているのを、妻が泣きながら止めた。1年間の休職をへて今年3月、会社をやめた。

4月に介護スタッフとして再就職したが、いまも精神科に月1回通院し、抗うつ薬を飲んでいる。

前の職場で上司から叱られた場面を思い出し、1日に数回、気分が悪くなる。だが、職場では薬は飲めない。「うつ病の薬を飲んでいることが職場にばれたら、クビになるかもしれない。いつもビクビクして働いている」と語る。

サラリーマンの心の病が増えているのは、バブル経済崩壊後の1990年代からと指摘する声もある。

過去30年ほどの医療保険の利用状況を調べた神戸大大学院の山岡順太郎研究員は「心の病の受診は90年代後半から増え、最近10年間で倍増した」と語る。

「自分の心と体との対話を、毎日心がけています」

うつ病を抱えながら、NPO法人で働く千葉県の50代男性は語る。

発症したのは、出版社で働いていた13年前。担当する雑誌や単行本の数が急に増え、毎日3時間ほど残業していた。帰宅後も仕事のイライラがおさまらず、不眠に悩まされた。病院で「抑うつ状態」と診断され、出版社を辞めた。

3年間の自宅療養をはさみ、2008年にNPO法人に再就職した。昼過ぎは体がだるくなるので、主な仕事は午前中にすます。

「なんとか働いている状態。少しでもマシな人生を生きたい」と語る。

心の病が増えていることについて、山本晴義・横浜労災病院勤労者メンタルヘルスセンター長は「心の病への理解が広がり、受診の心理的ハードルが低くなった面もある」と分析する。

山本センター長によれば、ストレスゼロを目指さず、運動や余暇の時間をつくり、ストレスを解消する習慣づくりが大切という。本人が不調に気づかない場合は、上司や同僚が不調のサインを見逃さないことが求められる。（牧内昇平）

あなたのストレス度は？

- □ 非常にたくさんの仕事をしなければならない
- □ 時間内に仕事が処理しきれない
- □ 一生懸命働かなければならない
- □ かなり注意を集中する必要がある
- □ 自分の部署内で意見のくい違いがある
- □ 自分の部署とほかの部署とはうまが合わない

東京医科大「職業性ストレス簡易調査票」から抜粋。中央労働災害防止協会のホームページで自己チェックできる
http://www.jisha.or.jp/web_chk/strs/index.html

7月16日早朝　NHKラジオ朝一番　ビジネス展望

『働き方の多様化とは何か』内橋克人　2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説　実に明快分かりやすい解説に

私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

◎　多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎　正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて　都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。

同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、

雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。

正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、

いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル　スタンダードが

非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、

けっしてそんなことはない　」

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎　例えば、『オランダモデル』。の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の２種類しか労働は存在しない。

From Kobe　2013.9 月

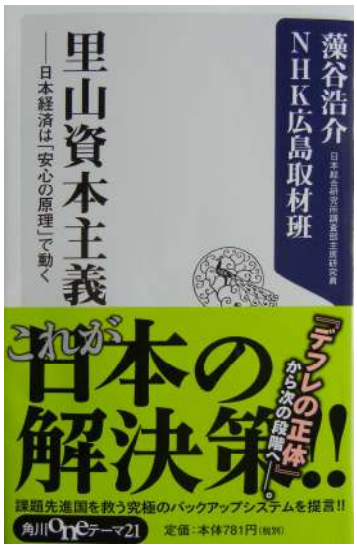
新書　藻谷浩介・NHK 広島取材班

「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介

今　日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義　＆ 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

2013.8.25.　　By Mutsu Nakanishi



「今　一番素直に自分の頭に入る」社会・経済論として何度か紹介した経済評論家内橋克人氏の論。内橋克人氏の提案する「地域自立自給経済圏」と趣旨をほぼ同じくする「里山資本主義」の具体的な構築論ならびに着々と推進が進む地域実践例が、この文庫本**「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」**に記されていましたので、ご紹介。

この本では「里山資本主義」の考え方や具体的な実践を「マネー資本主義」と対峙するのでなく、そのサブシステムとして構築推進することで、疲弊・過疎化から地方を再生し、日本経済変革の道が提案されています。

私の一番知りたかった具体的な地域自立自給経済圏の実践例をこの新書　藻谷浩介・NHK 広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で働く-」から、整理して紹介。

<< 内橋克人氏の提案する「地域自立自給経済圏」>>

「グローバリゼーション」「国際競争力」錦の御旗に大企業・大都市圏を中心とした中央集権的な「市場原理主義・金融マネー資本主義」「強欲資本主義」に警鐘を鳴らし続け、「市場主義から人間主語へ」の転換を求める内橋克人氏。

日本経済が大量生産・大量消費を前提とした量産効果に依存しているという弱点をいち早く指摘すると共に、「改革」が剥き出しの市場原理主義が社会的費用を弱者に転嫁しかねないと、アメリカ流の聖域なき構造改革に厳しく警鐘を鳴らし、「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済圏の創設を提唱する。

この自立自給経済圏とは　F（ﾌｰﾄﾞ）E（ｴﾈﾙｷﾞｰ）C（ｹｱ）をそれぞれの地域で自給する。

食糧・エネルギー・介護を含めた人間関係の自給圏を作り、これらを地域における新しい「基幹産業」にまで発展させて、地域の活性化を実現しようという考え方である。

《内橋克人氏の提案する自立自給経済の創生》

【from Kobe　2012.1.1.　http://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf より】

被災地だけでなく　日本の疲弊がますます露わに　人間復興・社会基盤の復興の両立を

「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して　新しい日本作りに踏み出そう

もう　気がつこう　マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ

国際マネー主義から脱して　市場主語から人間主語へ

2011 年 12 月 18 日　NHK BS 内橋克人　100 年インタビューより

賢さをともなった勇気を持って　頂点同調主義から脱出　市場主義から人間主語へ

矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生

日本では新政権が発足しても、「アベノミックス」・「TPP」・「原発の推進」など経済対策・東日本大震災復興事業ひとつをとっても　中央集権的一辺倒の方向は相も変わらず、いまだに大企業･中央中心的なアメリカ流の「マネー資本」一辺倒。「実感のある豊かな生活を実現してくれる」との確信を持つ人がどれだけいるだろうか・・・・。

これら施策の果実を取り込んだごく一部の人を除き、格差は日増しに増大し、地方の疲弊はますます進み、その中身実

態が次々と垣間見えるにつれ、自衛の道を模索しつつも、無責任な楽観主義と社会不安・無力感の間をさまよっている。
　一方、特に震災地域の急速な生活復興や地方疲弊の脱却には　地域内での「マネー循環」が欠かせぬと思えるが、ここでも　地域外へのマネー流出を促す中央集権システムが顔を出しているという。
口で言うのはたやすいが、自立自給経済圏の創設の推進は難しい。なんとか　未来へつながる永続的な推進根業モデルが立ち上がらないと、これも絵に描いた餅になると・・・・・。
　まだ、日本の潮流にはなっていませんが、「マネー資本主義」から脱却した日本再生への新しいアプローチ道　が地方で始まっていることを記した　新書本　藻谷浩介・NHK 広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」を紹介。ご一読を。

2013.8.25.　From Kobe　by Mutsu　Nakanishi

新書　藻谷浩介・NHK 広島取材班
「　里山資本主義　-日本経済は『安心の原理』で動く-　」
内容　要約

1.「里山主義」　（新書「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」表紙横帯より）

かつて人間が手を入れてきた休眠資産を再利用することで、原価０円からの経済再生、コミュニティ復活を果たす現象。安全保障と地域経済の自立をもたらし、不安・不満・不信のスパイラルを超える。危機を超え未来を生む、すり潰されない生き方の提案として登場。

2.　里山主義による地域自立自給経済圏の実践を進める街の紹介

中国山地の山深いたたらの郷　岡山県真庭市と広島県庄原市（西城）

「里山資本主義」というネーミングに惹き付けられましたが、中国山地奥深い過疎地　岡山県真庭市やすぐ隣の広島県庄原市西城での　1.バイオマス発電を中心とした持続的な地域循環システム取組の話や 2.里山の雑木を燃料にした燃料効率のよい「エコストーブ」が「ストーブ」にとどまらず、原価ゼロの暮らし」のアイデアを次々と生む。
電気エネルギー消費の抑制や荒れ果てた農地・農業の再利用など地域自立の道を進める話。

- 真庭市の「バイオマス集積基地化」による地域持続型経済圏の推進
  真庭市の製材企業から出る「原価ゼロの資源」木屑を燃料ペレットに変えて、バイオマス発電・家庭燃料など熱燃料としてペレットを使うことにより、「発電」「製材」「ペレットボイラー」「ペレット生産」など地場産業を興す。
  現在　真庭市の消費エネルギーの 11%が木のエネルギーでまかなわれ、この数値はさらに上昇中
  地域の外へ金が流れ出るエネルギー収支が大幅改善し、地域活性化の源になっている。
- 庄原市西城　燃料効率 95%を超える家庭用「エコストーブ」の開発による森林エネルギーによる化石エネルギーからの脱却と原価ゼロ資源利用・里山再発見発想の町づくり

「バイオマス発電だけでは成立しないだろう」・「都会からやってきた人たちの気楽な田舎生活・スローライフの取り組みがしゃれた空気を街にふきこみはじめたのか・・・」などと懐疑的な目で読み始めたのですがさにあらず。
ペレット燃料の徹底的な活用。雑木数本で燃焼するエコストーブの高性能ぶりには目を見張る。都市から供給されねばどうしようもないと思っていたエネルギーがサブシステムとして自立し増加の道をたどっている。
「原価ゼロの暮らしとして　里山を食い物にしよう」というアピール。
この地の森林・製材から大量に出てくる原価ゼロ円の木屑などの資源をエネルギー資源に変える実践取り組みや、食料資源としての里山など、次々と実践アイデアを生みつつ、それが新たな産業・雇用を生んでゆく。
地域内エネルギー自給をめざす取組を軸に地域自立への道とその仕組みが示されてゆく。
過疎を逆手にとっての豊かな暮らしへ展開して行く取組が、行政も動かし、地域を変えてゆく。
外部に頼らずとも、持続的なシステムが着実に地域の中で育ち、地域を自立経済県に変化させ、街を活性化する。
こんな持続的な地域循環のシステムが過疎地に構築でき、地域を帰られる。それも　誰もが斜陽と思っている森・里山の資源を軸に・・・。外部からの金・産業・インフラを投入せねば地方の過疎化は食い止められぬとの思い込みが一気

に打ち壊され、懐疑的だったのが、吹っ飛んで「こんな継続的なエネルギー地域循環システムができるのだ」と・・・・・。

この本では、これらの実践は「世界経済の最先端」だといい、「この中国山地の奥深い過疎に悩む山郷での実践は突発的なものでないという。

江戸時代隆盛を極めたこの中国山地の「たたら製鉄鉄山」では、森･里山の資源を軸とした地域循環型の経済圏が 100 年以上持続して成立していた」ことを指摘する。そして、自立経済圏構築の継続性には「エネルギーの化石燃料からの転換」そして、「の森･里山のエネルギー資源の活用」に着目した構築がきわめて重要であると説く。

そういえば　たたらの里の森林資源ばかりでなく、砂鉄をとるために切り崩した里山の跡地が牧場・棚田となって、鉄山とともに地域経済に寄与していったことなども頭に浮かんでくる。

日本伝統の匠の技術としてしか語られることがなくなった「たたら製鉄」。その仕組みにスポットライトが当てられ、21 世紀型の新しい日本再生・「地域循環型自立経済圏」の構築実践モデルとして語られているのがうれしい。

中国山地のたたらの郷　真庭市や庄原市（西城）　その地域自立型エネルギーシステム構築を軸とした自立経済圏成功体験の底に「たたら製鉄　鉄山」があるという。

3.　海外にもある里山主義による地域自立自給経済圏の国「オーストリア」

オーストリアは日本と同じ急峻な山岳地帯を抱える国ながら、機械化された最先端の林業とペレット燃料を徹底利用したエネルギー政策に取り組む。

中でも国境の町・ギュッシング市では 1990 年にエネルギーの脱化石化を宣言し、木質バイオマスによる地域冷暖房やコジェネレーション発電によりエネルギー自立を実現させている。

しかし、バイオマス発電・ペレットなどはそもそも　本体の木材利用産業があって、そこからの大量の「原価ゼロ資源の供給」があってこそ成り立つ。

真庭・庄原の例にしても、現状「原価ゼロ資源木屑の供給」には限界があり、更なる広域地域経済圏の構築には「原価ゼロ資源木屑の供給」を可能とする「本体の木材利用」の産業の展開が不可欠。

国を挙げて「バイオマスによるエネルギー自立」を進めるオーストリアでは鉄筋コンクリートの強度に匹敵する建築木材として「集成製材」の利用を推進し、積極的に木造高層建築の推進に取り組む。

直角方向に張り合わせた集成材 CLT（クロス・ラミネイティッド・ティンバー）が無類の強度を発揮し、オーストリアやイギリスでは CLT を利用した 9 階建ての木造高層建築物まで登場しているという。

日本ではセメントが容易に入手できる日本で、今後木材の高層建築物への利用解禁されたとしても　一気に進むかどうかは未知数ではあるが、鉄筋コンクリートに代替できる木材の集成材が登場する時代にもなっている。

《「木質バイオマスでエネルギー自立を実現したオーストリア」の安定な経済　2011 年》

・失業率　EU の中で最低の 4.2%　　・一人当たりの名目 GDP 49688 ドル（世界 11 位）

・対国内投資額 前年比 3.2 倍の 101.6 億ユーロ　対外投資額 前年比 3.8 倍の 219.5 億ユーロ

この安定した経済をささえるのが、里山資本主義。

国を挙げて木材を徹底活用して経済自立することに取組み、その成果が上記の経済安定につながっている。

また、「脱原発」を憲法に記している国でもある。

日本では斜陽とみなされる林業・製材業には大型の先端機械設備などの先端技術が導入され、最新技術が支える先端産業となり、材木関連産業は今や国の重要な輸出産業。都市には木造の高層ビル建設が進み、街には　バイオマス発電の電気も併用供給され、家庭には熱効率のよいペレットボイラーがすえつけられ、これらと共に新しい産業と雇用が次々と生まれているという。

- **オーストリアの製材メーカー「マイヤーメルンホフ」社**では年間 130 立方メートルの木材の供給し、製材・加工からバイオマスまで手がけ、町では熱水パイプラインが通り、年間 6 万トンというペレット工場も持ち、町では　ペレットを快適に利用するオートメーションシステムが整っている。
- **「熱効率 90%を超えるペレットボイラー」**今ペレットボイラーの普及が急速に進みつつあり、これを軸にバイオマス周辺産業が地場で急速に発展し、多くの雇用も生まれている。
- **森林伐採と永続的森資源の管理**

「森林官と森林マイスター制度による徹底した森林保護･伐採の教育と林業実践」により、
林業は「持続可能な豊かさ」を守る術として　バランスの取れた森林の伐採と植林が進む。
森林はオーストリア有数の外貨の稼ぎ手　木材関連産業で年間 30～40 億ユーロの貿易黒字
となっている

内陸国オーストリアでは、まだ　エネルギー・電力を他国から輸入しているが、上記した木質バイオマスへの国を挙げての取組で、その輸入量も減じる方向にすすみ、「エネルギー自給」目前だという。

4.　里山資本主義に基づく地域循環型経済取組の広がりの紹介

地域の価値に気づき　地域に根ざした活動が違った価値を付け、広がってゆく

売れる秘密は「原料を高く買い　人手をかける」　そんなオンリーワン価値も生まれているという

1. 山口県周防大島の地場産業の果樹農業を活かしたジャム園の経営
   自分も地域も利益をあげる街に眠るアイデア・技術の掘り起こしによるオンリーワン化のジャム作り
2. 高知県大豊町の真庭モデル導入の試み
   高知県は地域収支を見ると林業は黒字なのに製材業は赤字。そしてエネルギーは圧倒的な赤。
   これを改善する取り組みで地域を掘り起こす。
3. 島根県の耕作放棄地を活用した放牧の取組
   食料自給率 39%の日本にひろがる膨大な耕作放棄地　この方基地の活用
   ヨーロッパでは　整然と整備された草地が美しい田舎の景観を作っているのに、日本では雑草生い茂る荒地化が進む。この差はなぜか・・不思議でしたが、牛の放牧が勝手に荒地を草原に替えてくれることを数年前に知りました。　この島根県の取組も遊休地での自然放牧が新しい価値を生む。
4. 島根県邑南町の移住女性による「耕すシェフ」レストラン。
   外へ市場を求めず、地域で食す　楽しみが新しい価値を生む
5. 鳥取県八頭町のホンモロコの養殖も耕作放棄地を活用した取組
   遊休地に里山にある水を引いて、商品価値のある「ホンモロコ」を育てる。

5.　まとめに変えて　　地域収支から見える持続自立型経済圏創設への取組

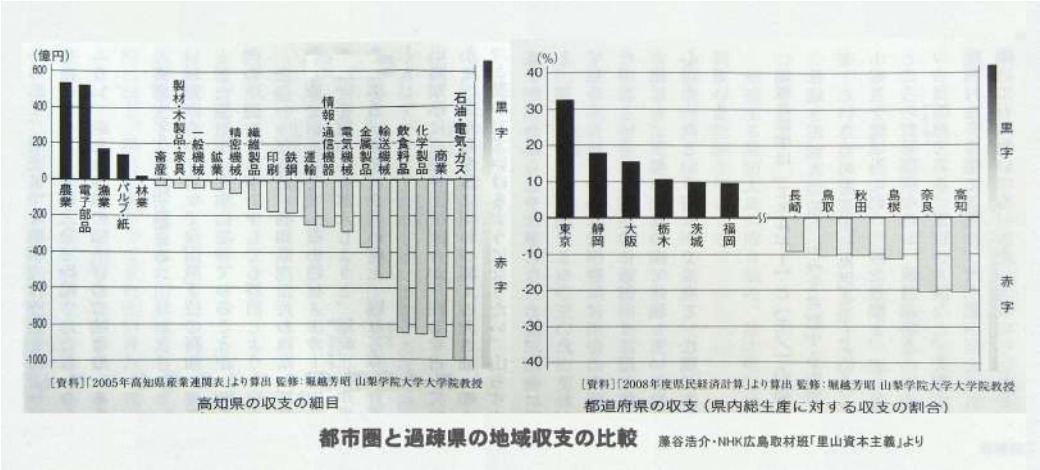
新書「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」はこの後　下記のような項がつづいている。

1. 里山資本主義の延長戦にある「無縁社会”の克服」取組み
2. 「スマートシティ」のシステム構築を検討する最先端プロジェクト
   最先端の取組は里山資本主義の取組と驚くほど一致している
3. 結び　里山資本主義の爽やかな風が吹き抜ける、2060 年の日本

私の一番興味のあった里山資本主義の実践活動の具体的な紹介もほぼ済んだので、今回はここで私の紹介の終わりにしたい。ご興味のある方は　ぜひ　「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の本で。

この本に書かれた内容は中央集権的「マネー資本主義」に警鐘を鳴らし続け、日本再生・地方再生の道を「自立経済圏創生」であると説く内橋克人氏の経済論と同根・共通で、力強く地方再生の道を進む地域が具体的に示されている。

右の図は「里山資本主義」の本に掲載されていた都市圏と過疎地の地域収支のグラフ。



都市圏と地方とで、地域収支の差が大きく、しかも　地域自立にはエネルギー･食料の収支改善そして強みとして農業・漁業･林業など地場産業の地域循環型産業

としての新しい取り込み展開視点が必要なことがよく分かる。
これに　今直面している「医療」を加えれば、まさに　内橋勝人氏がいう食糧・エネルギー・介護を含めた人間関係の自給圏を作り、これらを地域における新しい「基幹産業」に育てる CFE 自給圏の創設そのもの。

今までなにか始めても　すぐ国や大企業など中央に飲み込まれてしまいそうで、地方自立の立ち行く道に懐疑的でしたが、具体的な実践取組みが始まり、また、インターネットに書かれている自立取組例の記事を色々読むと地方の行政が、今までの取組とは別に　この里山主義の実践取組に気づきはじめ、新しい取組が始まっていることも知りました。
地産･地消さらに地方へ行って　観光･食事そして物産を買う楽しみにも。
ちょっとですが、地域を眺める目が深まりました。
地方が武器を持ち始めて新しい道を展開する。日本の先が明るく見えてくるにうれしい限り。

新しい日本再生の鼓動がそれぞれの特質を生かし、地に足が着いたオープンな取組がいたるところで始まれば、それが地方分権・地方再生そして東北再生への道へとつながってゆく。
政治家の選挙戦で見る地方分権論とは違う草の根地方分権論でもあると。

また、私の知る山深いたたらの里の取り組みが紹介され、それもこの里山主義が示す地域自立型経済圏として、たたら製鉄の遺産が紹介されていたのにもうれしくなって読みました。
そんな新書　　また、私の好きな内橋勝人氏の経済論に実践の道がついているのもうれしい。
ぜひ一読を。

2013.8.25.　from Kobe　by Mutsu Nakanishi

中国山地　たたら製鉄　鉄穴流しが作った棚田の景観　　右の写真は牛が放牧された休耕田

【参考】

1. From Kobe　2012.1.1.　内橋克人氏　100 年インタビュー抜粋

被災地だけでなく　日本の疲弊がますます露わに　人間復興・社会基盤の復興の両立を
「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して　新しい日本作りに踏み出そう
もう　気がつこう　マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ
国際マネー主義から脱して　市場主語から人間主語へ
2011 年 12 月 18 日　NHK BS 内橋克人　100 年インタビューより

http://www.infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf

2.　From Kobe　2013 年 8 月　あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にすっと入る
NHK 朝一番　ビジネス展望　内橋克人氏の解説を紹介
http://www.infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf

【2021年10月 From Kobe】 参考資料　2018年12月　From Kobe より
常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星
「経済評論家　内橋克人氏　逝去」の訃報に接して 懐い出すままに

【From Kobe 12 月】収 録
日本の行く先がおもいやられる師走
数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ　若者たちへの思いが募る
こんな思いを代弁して、神戸新聞　内橋克人氏ほかの評論にも

夏日まで飛び出す異常気象の中で迎える師走　なにか無力感ばかりがただよう 12 月のはじまり。
気象ばかりでなく、世の中の動きまでもがおかしい昨今、
日本はこれからどうなってゆくのだろうか・・・・。
現実に蓋をして、強がりばかり言っても、相手は見向きもしてくれず、ばらまく金もいよいよ底をつく。
想定外では済まされぬ激動の地球環境に国土はぼろぼろ。産業構造は大きく変化し、技術力も技術立国も昔の幻影　国を支え、生産を担う若者の姿もまた幻影。急激に高齢化社会　そして格差社会が進行中。
でも　不平不満の現実に眼をそらし、我が身を守ることに精一杯。
「明日は我が身」におびえながらも、今を追う。付け焼刃の取り繕いの取組ではどうにもならぬ日本の現実。
数が頼りの日本　政企業も官僚も日本の実態・現実をしっかり見定めよ。
日本はこれから、今成長期を迎える国々とどのように組して行くのだろうか・・・・・
とはいえ　ぶつぶつ言っても　所詮　こちらも　打つ手を持たぬ後期高齢者。
成功体験　仲間意識にしがみついて「想定外」「付けを自己責任」と他人に付けを回して知らぬ顔　そんな老害リーダーに興味なし。若者たちの新しい国づくに託して、若者たちに託す。
11 月 29 日神戸新聞　「針路 21」欄に誰にも言えぬそんな思いをすかっと切りだす内橋克人氏の評論が掲載避けているので、　From Kobe　毎月のぶつぶつに変えて。ご紹介。
皆様には　どううつるでしょうか・・・
来年は新しい若者の時代元年に舵を切ってほしい。
老害者たちは早くリタイヤせよとひとりぶつぶつ。

2018. 11. 29.　神戸新聞（1・2面掲載）
「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相　針路21

客員論説委員　内橋 克人

目立つ内外の食い違い

時の政権にとって「首脳会談」は効果絶大なパフォーマンスの場である。安倍首相とトランプ大統領との会談はすでに8回、プーチン大統領とは23回に及ぶ。
各国トップと親しく握手を交わすシーンが国民の目に灼きつけられ、「外交の安倍」がすり込まれる。米国首脳との“蜜月ぶり”演出の成否は支持率に響く。
その安倍外交に際立つ三つの特徴がある。まず首脳会談で何が話し合われ、何が合意されたのか、会談後に明かされる両首脳の発表に食い違いが目立つことだ。「日米通商交渉入り」をめぐるトランプ氏との会談。北方領土返還をめぐるプーチン氏との会談。いずれも直後に明かされた合意の中身に両首脳間で隔たりが大きい。
第二にそれら外交パフォーマンスには手土産が用意される。9月末、国連総会後の記者会見でトランプ氏は「日本はすごい量の防衛装備品を米国から買うことになった」と明かした。が、安倍首相自身はいまだ黙して語らず、だ。
第三に国会で重要法案審議中であれ、お構いなく足しげく海外に出向く。経済界首脳の大集団が“お供”する。
「外交の安倍」は何を生んだのか。冷静な総括が求められる時がきている。
国会での首相発言に合わせて事前、事後に新しい言葉と文脈がひねり出される。森友・加計問題では公文書まで捏造された。同じ手法の辻褄合わせが、国際協議の場で常套化すれば、日本という国の信用が問われかねない。いま話題の「日米通商交渉」入りは「物品協定」（TAG）なのか、それとも「自由貿易協定」（FTA）を目指すものか。日米間で深まる認識格差が典型例といえる。
前者ならば農産物、工業製品など「モノ」の輸出入についての関税交渉であり、後者となれば投資から流通、金融、通信、サービスなど広範囲にわたる包括的通商交渉となる。それを多国間ではなく日米2国間で取り決めるというのだ。
今月13日の安倍首相と来日中のペンス米副大統領との共同記者会見。ペンス氏の発言をめぐって日本のメディアは混乱した。同氏の発言をFTAと訳して報道したNHKニュースはすぐさま訂正を迫られた。「（ペンス氏は）FTAとはいっていない」と日本政府は強弁する。
「Trade Agreement on goods」、略してTAG。「日本製・造語」である。安倍首相が繰り返す「自由貿易協定(FTA)とは全く異なる」との発言に合わせて「つくり出された」。ちなみに記者会見でのペンス氏発言は「Bilateral Trade Agreement」（2国間協議の意）というものだった。
しかし、同氏は来日前夜、自らのツイッターで「Free Trade Agreement」、すなわち正真正銘のFTA交渉がこれから日米間で始まるのだとアップしている。
TAGとは国内向けの造語であり、それをムリヤリ通せば、さらなる難問が待ち構える。すなわち米国の「対日戦利品」が世界貿易機関（WTO）加盟国のすべてに滴り落ちることになるからだ（WTO協定「第1章第1項＝最恵国待遇」の原則。いずれかの国に与える最も有利な待遇を、他のすべての加盟国にも与えなければならない、というもの）。
唯一の例外規定がFTAなのであり、筆者は9月26日（日本時間27日未明）の首脳会談直後からそう指摘してきた（NHKラジオ、農協新聞＝10月1日号など）。AP通信はその日のうちに「FTA交渉で日米合意」と報じている。
自動車への高関税措置の発動がトランプ流ブラフ（脅し）の手裏剣だったという。
まずはTAG、次いでFTA―国内世論対策を真の狙いとする安倍外交の二段階分離方式である。日米両国で「食い違いあり」とみせて、その実、ひそかな「合意」が形成されている、とも官邸筋は筆者に明かした。農産品での大幅譲歩はもはや既定路線だ。
こうした「食い違い」はプーチン大統領との首脳会談においても顕著だった。
「日本の安倍首相が先に提案してきた」とプーチン氏は自国メディアを前に口にした。歯舞、色丹2島の先行返還で合意した、というものだ。しかし、安倍首相は「あくまで4島だ。2島先行論ではない。方針は変わっていない」と強弁を続ける。
強烈な自己弁護と保身本能が一貫、巧みな「言い繕い」をひねり出すのか。国の内外で使い分ける外交手法は国家的リスクをも伴う。国民の「知る権利」と「安全保障の秘密保護」の両立をうたう「ツワネ原則」の再確認が、日本国政府の緊急課題である。
（うちはし・かつと＝評論家）

国を危うくする言い繕い

針路21

「安倍外交」の実相　針路21

ご興味くだされば、上記内橋克人氏の評論　下記サイトにありますので　拡大してご覧ください。
URL: http://www.infokkkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf